

<聖徳太子>

謎に包まれた歴史上の人物と言えば、聖徳太子が筆頭だろう。一度に10人の言葉を同時に理解したなどの超人的な逸話から、存在自体が怪しまれている節もあり、昨今では、歴史教科書に於いても「聖徳太子」という名が「厩戸皇子（ウマヤドノミコ）」に書き換えられようとして問題となった。これなど、聖徳太子が長らくお札の肖像画にもなり、日本人としてのアイデンティティ形成に繋がっていた証左である。そんな謎多き聖徳太子の実態に迫ってみよう。

（<ご案内>にも記されているように、都度、引用先を記載することはしていないが、本記事に於ける主な参考文献は、関裕二著『「女帝」誕生の謎（講談社）』である。）

1：一般的な聖徳太子観（Wikipedia）

聖徳太子は後世の諡号（しごう：死後におくる名前）で、正式名は厩戸皇子、豊聰耳（トヨトミミ）などである。第31代・用明天皇の第2皇子で、母は第29代・欽明天皇の第3皇女、穴穂部間人皇女（アナホベノハシヒトノヒメミコ）である。

初の女帝である第33代・推古天皇のもと、蘇我馬子と協調して政治を行い、遣隋使を派遣して大陸の文化を取り入れ、冠位十二階や十七条憲法を定める。仏教を取り入れると共に神道も厚く信仰し、興隆に努めた。広隆寺では、大工の祖として崇められる。

厩の前で生まれた、10人の人の言葉を同時に理解した、などの逸話がある。

特に、厩の前で生まれたという逸話と大工の祖ということから、モデルはイエス・キリストなのではないか、というのは、飛鳥昭雄氏などの説である。

2：故・元伊勢籠神社宮司の示唆

聖徳太子の真相には、実は籠神社の第82代宮司・海部光彦氏の示唆が重要である。（以下は名誉宮司となる前の、宮司時代のご発言である。）

- かつて海部氏は丹後地方にやって来て、その後、琵琶湖を渡って近江や東海地方に至り、また、京都から木津川を上って後のヤマトとなる地へと至った。
- 山背から広隆寺を含む太秦一帯は、海部氏が治めていた。

- ・カモ氏は同族であり、上賀茂の賀茂別雷神（カモワケイカヅチノカミ）は彦火明命（ヒコホアカリノミコト＝海部氏の祖神）と異名同神である。
- ・広隆寺の聖徳太子像には、即位の礼で陛下がお召しになるのと同じ黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）が新しく調進され、広隆寺に下賜されて着せられる。
- ・広隆寺の牛祭（うしまつり）では、ひたすら牛を追いやる。

一般的に、広隆寺や太秦一帯は、最終的にその地を支配した狭義の秦氏（＝原始キリスト教徒）の土地とされているが、何と、元々は海部氏の領地だったのだ！だから、京都で最も重要とされるカモ神社では上と下で字を変えて、本来の天神族で同族の上ガモには上賀茂、鳥（八咫鳥）に関わる狭義の秦氏（＝原始キリスト教徒）の下ガモには下鴨と当てた。

天神はアマカミ＝海神である。上賀茂の御神体は裏の神山（こうやま）であり、籠神社奥宮・眞名井神社の御神体は裏の天香語山（あめのかごやま）で、共に山を御神体とする。すなわち、上＝神、ということである。葵祭の発祥も実は籠神社で、籠神社では藤祭（＝不死祭）とも言うが、葵祭に於ける最終的な祭祀場が下鴨ではなく上賀茂であること、最も重要な御祭神が籠神社の系統であることを暗示している。

ここで、わざわざかつての海部氏所有地だった広隆寺にある聖徳太子像について発言されたことは、聖徳太子の真意を察せよ、ということである。つまり、聖徳太子は海部氏に関係が深い、ということに他ならない。

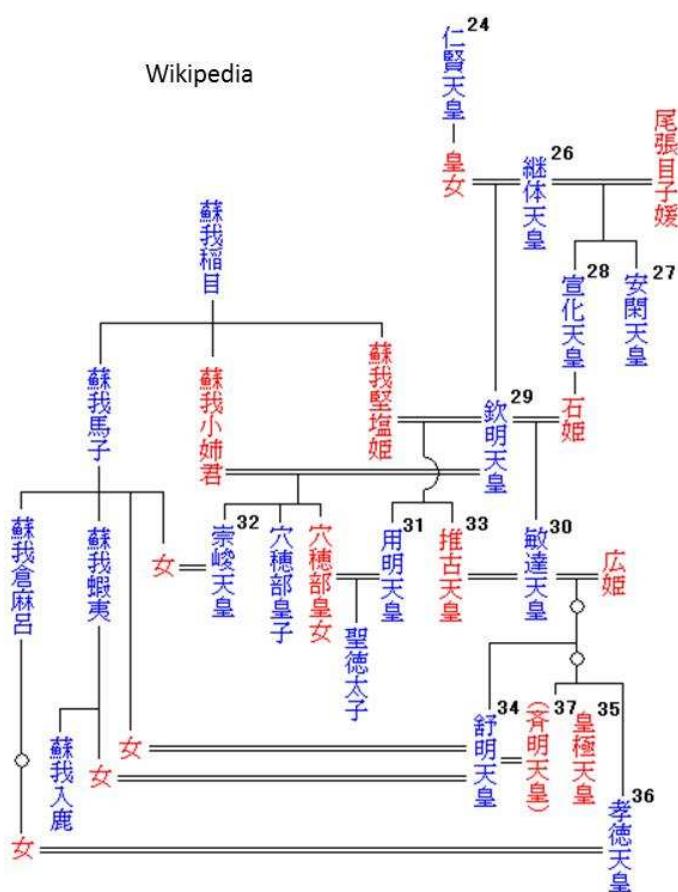
広隆寺については既出の記事にも記載されているが、ここでは正攻法として系図から考察し、その後、広隆寺について復習を兼ね、触ることとする。

3：系図

聖徳太子を取り囲む人物は、太子の真相を解き明かすために重要である。父方を辿ると第26代・繼体天皇だが、繼体天皇は第15代・応神天皇の5世孫とされる傍系で、越（こし）の国（福井県敦賀市から山形県庄内地方の一部に相当する地域）から担ぎ出された。（一説には近江とも。）皇統は代々継いでいくものだから、わざわざ“繼体＝体（國體）を継ぐ”などと名付ける必要は無いし、都から遠く離れた北陸方面からというのも普通ではない。

国宝に指定された海部氏系図の勘注系図の記述に「応神天皇の時代に建振熊宿祢（タケフルクマノスクネ）が若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、以降は

海部直となった」という記述は、邪馬台国（やまとのくに）の大王・建振熊宿祢（タケフルクマノスクネ）が若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、応神に王権を譲ったことを意味し、代わりに邪馬台国の王権委譲という最大の屈辱を味わわされたタケフルクマは最も徳の高い第16代・仁徳天皇として世界最大級の墳墓に祀られた。（<神の名を冠する天皇>）このことからすると、北陸出身の継体の血統は海部氏系と考えられる。その継体の后は海部氏の兄弟分家である尾張氏（尾張草香）の女、目子郎媛（メコノイラツメ）であり、子の第27代・安閑（アンカン）天皇、第28代・宣化（センカ）天皇はこの尾張系の母の血と、海部氏系の父の血を引く。



第29代・欽明天皇の母は第24代・仁賢（ニンケン）天皇の娘だが、仁賢の父、イチノベノオシハは第21代・雄略天皇に殺された（とされる）。そのため、仁賢（意富祁王、オケノミコ）は幼き時、弟の袁祁王（ヲケノミコ、後の第23代・顯宗（ケンゾウ）天皇）と共に、まず丹波国与謝郡（籠神社の本拠地）に逃れ、後には播磨国明石や三木の志染（しじみ）の石室に隠れ住み、兄弟共に名を変えて、丹波小子（タニワノワラワ）と称した。その後、身分を明かして

弟が先に即位し、後に兄が即位した。

逃亡先は、当然何らかの身寄りがある場所のはずで、“丹波小子”と名乗った以上、仁賢は海部氏系の血統である。これは古代、母方の実家が子を育てたことからもそう言える。そうすると、欽明は父方、母方共に明らかに海部氏系であり、続く第30代・敏達天皇は海部氏と兄弟分家の尾張氏の血も引く系統である。

第31代・用明天皇、聖徳太子も父系としては欽明の海部氏系だが、用明の母方は蘇我氏である。聖徳太子の母の穴穂部間人皇女は欽明と蘇我氏の娘の子だが、読み方こそ違え、“間人（たいざ）”という海部氏の丹後半島縁の名が付いている。古代、皇子・皇女は一定の年齢まで母方の実家で養育され、育った土地の名前を付ける慣習があったことからすれば、穴穂部間人皇女は丹後縁の人物ということである。そして、欽明の二人の妻は、蘇我稻目の娘である。そうすると、蘇我氏と海部氏に深い繋がりが伺える。

4：蘇我氏とは？

堅塙姫（キタシヒメ）、小姉君の父は蘇我稻目宿禰である。稻目から遡ると、稻目→高麗（コマ）→韓子（カラコ）→満智（マチ）→蘇我石川宿禰→武内宿禰

となる。武内宿禰は第8代・孝元天皇の孫とされ、7人の子は大和朝廷を支えた葛城氏、平群（ヘグリ）氏、蘇我氏、巨勢（コセ）氏、紀氏、波多（ハタ）氏、江沼氏の祖となったとされている。この人物は仙人のような長寿の存在だが、歌舞伎の襲名のような制度であれば、一人の人物であるとは限らない。

その真相は、第8代・孝元天皇（大倭根子日子国玖琉命、オオヤマトネコヒコクニクルノミコト）に比せられる意富那比命（オオナビノミコト）=大海宿祢命（オオアマノスクネ）=武内宿禰で、その時の祭祀女王は邪馬台国女王・日女命（ヒメノミコト）=卑弥呼である。（<日本の真相5>）秦氏とされる波多氏が武内宿禰の子とされているのは、ヤマト初の統一という栄誉に浴したい秦氏に因る系図の作為に他ならない。

さて、蘇我稻目は宣化天皇元年（AD536年）に天皇の命により、凶作に備えるために尾張国の屯倉（みやけ：律令制度以前の天皇・皇族の領有地のこと、本来は稲穀を収納する官倉そのものだった）の糲を都に運んだとされる。何故、尾張國なのか？

尾張の熱田神宮本殿では建稻種命（タケイナダネノミコト）が祀られているが、“稻の種=糲”で“稻目”と同義である。また、稻目は“稻芽”に通じ、“糲”

を象徴しており、糲=稻は日本の食の根幹である。(糲は、脱穀前の稻の果実に相当する部分。) 食の根幹と言えば豊受大神であり、海部氏が祀る。そして、熱田神宮の尾張氏は海部氏の兄弟分家である。

堅塩姫には“塩”が含まれるが、籠神社では塩土老翁(シオツチノオジ)が祀られている。塩土老翁は海幸山幸の神話に於いて、海幸彦の釣針を失くした山幸彦を目の詰まった竹籠に乗せ、海神の宮に導いた。また、神武東征に於いては、東に良い土地があることを進言し、いずれも神話に於ける重要な神である。籠神社での御神格は豊受大神・大綿津見神・住吉神に包含され、海部氏の祖である倭宿禰(ヤマトノスクネ)も神武天皇を導いたとされるので、塩土老翁=倭宿禰である。

つまり、堅塩姫の“塩”は、海部氏との深い関係を暗示する。先の武内宿禰は異常な長寿で、老人であることは共通点であり、籠神社に關係の深い浦島伝説でも、最後に浦島太郎が老人になってしまうことは、暗示的である。

このように、蘇我氏は海部氏・尾張氏との深い関係が伺える。以下、<籠神社と眞名井神社>に記載されている“日本國の歴史の流れ”からすると、十支族の中の大王家、エフライムの海部氏は渡来して縄文王家と婚姻して和平を結び、鉄の技術を持っていた海部氏が大王家となった。鉄剣とユダヤ三種の神器のアロンの杖をエフライムの大王が有し、これらが後に物質としての「天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)=草薙神剣」とされた。そして、剣に因み、渡来後の初代大王は天村雲命と命名され、記紀では剣が武に関わることから、“神武”天皇とされた。

その後、やや遅れてペルシャ系の十支族、始皇帝に命じられた徐福率いる一団が渡来し、弥生大王家の海部氏と合流して、婚姻関係を結んだ。それにより、弥生時代の物部王国が誕生した。共に女神イナンナを最高神としていたから、婚姻は容易である。そして、海部氏をトップとする物部氏となった。

両者は後に大和となる地に進出して邪馬台国を築き、共に政(まつりごと)を行った。その際、大陸や半島との交易は丹後が、政は奈良の地(纏向)が中心となり、政体と國體の役割が分離して、丹後を拠点とした海外交易は海部氏(=國體)、纏向の祭祀と政は葛城氏及び海部氏の兄弟分家である尾張氏(当時は高尾張氏)とが分担した(=政体)。この葛城氏こそ、海部氏と婚姻関係を結んだ、徐福率いる一団の中心的末裔である。

大統一王国では、海部氏系の巫女女王トヨが祭祀を司り、徐福系オトヨノミコト(後の崇神天皇)が政治を行った。神の分身が八咫鏡、依り代が草薙神剣、王權のある土地のシンボルが八尺瓈勾玉とされた。(都は卑弥呼の都祁野(つげの)から、トヨの纏向・ダンノダイラヘ。これについては後述する。)

太秦にある始皇帝を祀る大酒神社の伝承では、始皇帝の末裔の弓月君（ユヅキノキミ）が一団を率いて渡来したことになっている。始皇帝の秦はペルシャ系十支族であり、中東では月神ナンナル（＝シン）に因んで、月のシンボルが多い。そして支那では、月に生えるとされる想像上の木が桂である。つまり、桂木＝カツラギは始皇帝に関わる一族の暗示で、すなわち、葛城氏＝葛木氏がそれに相当する。なお、シンの娘イナンナが原型の豊受大神も月がシンボルで、月のシンボルの根源は、縄文海人の最高神エンキ（大山祇神）である。

後に狭義の秦氏（原始キリスト教）が渡来し、王権が海部氏から秦氏へと委譲されると、列島の一族は皆、改宗を迫られた。そもそも王権委譲のきっかけとなった事件は、それ以前に徐福系の出雲族が秦氏に御神宝を渡したことである。だから、徐福系は容易に改宗し、後に厚遇されたが、海部氏は最後まで抵抗したので、海部氏系は落とされた。（雲出づれば、太陽＝真相を隠す。秦氏には秦氏に与した縄文系、改宗した物部系の秦氏、狭義の秦氏があるので、歴史の真相解明は困難を極めている。）

厚遇されたもう 1 つの理由は、御神宝を渡す際、出雲族で兄弟間の殺人事件が起きてしまったことである。王権委譲のきっかけとなったこの事件の被害者（飯入根、イイイリネ）は、そのままだと後世、新たな王権政権を崇る存在となってしまう。その御靈を鎮めるために巨大な社を建造し、子々孫々がその御靈鎮めの役目を負うことになった。そして、その役目を負う国造が代替わりする度に、新国造が陛下の御前にて、出雲国造神寿詞（いずものくにのみやつこのかんよごと）を奏上するのである。

その徐福系の中心の一派が葛城氏であり、その末裔が蘇我氏なのである。波多氏＝秦氏の祖とされる武内宿禰から葛城氏や蘇我氏が出ているのは、秦氏を優位に置くための系図の作為だが、蘇我氏が「葛城氏の子孫だ」と主張するのはここに理由がある。蘇我馬子は元々蘇我氏の本居で皇室の領地となっていた葛城県の割譲を推古天皇に要求したもの拒否されたが、これなど、蘇我氏が葛城氏の系統であることを物語っている。

また、兵庫県相生市小河には宇麻志（うまし）神社があり、現在の祭神は宇摩志阿斯訶備比古遅神（ウマシアシカビヒコジノカミ）だが、明治維新以前は馬子宮と呼ばれ、蘇我馬子を祀っていたとされる。（Wikipedia）ウマシを宇摩志麻遅命（ウマシマジノミコト）と解するならば、それは物部氏の祖とされる人物で、ニギハヤヒの子である。海部氏の祖は、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊（アマテルクニテルヒコアメノホカアリクシタマニギハヤヒノミコト）とされることからすれば、海部氏に続く物部氏の一族ということである。

さて、ソガ氏は元々「蘇我」の表記ではなかった。ソガ氏が造顕した大宝藏殿北倉の戊子年銘釈迦三尊像という仏像には「歟加」とされているし、先代旧事本紀の天物部二十五部には「巷宜物部」とあり、推古4年(AD598年)に作られた元興寺露盤銘には蘇我稻目を「巷宜伊那米」と記載している。「宜」を「が」と読んだのは、古い秦代・漢代に基づくので、ここでも秦との関わりが暗示されている。また、出雲大社本殿の北側には、スサノオを祀るソガノヤシロがあるが、これは「素鷦社」と書く。

つまり、「蘇我」は後からの当て字で、徐福一団は不老不死伝説のために渡來したこと、聖徳太子=厩戸皇子がイエス・キリスト(=原始キリスト教秦氏の最高神)を連想させることから、「我、蘇る」を当てたのである。特に、蘇我馬子の名は象徴的で、“我、馬屋の子として蘇る”であり、聖徳太子に意図的に重ねている。この読み順は漢文的には正しくないが、“蘇民将来”と同じである。

「(封印されたこの国の) 民は将来蘇る」ということで、蘇我馬子の読みもこれと同等と見なせる。蘇民将来の話はスサノオの話だが、出雲大社でスサノオが祀られるのは素鷦社であり、スサノオ=豊受大神(籠神社秘伝)だから、海部氏と最高神は同じである。

このように、名前からして聖徳太子と蘇我馬子は重なるが、実際、馬子は皇后であった豊御食炊屋姫尊(トヨミケカシキヤヒメノミコト)を即位させ、初の女帝・第33代・推古天皇とし、厩戸皇子=聖徳太子を皇太子として立て、摂政とした。馬子は太子と合議して政権運営し、仏教を奨励し、冠位十二階や十七条憲法を定めて中央集権化を進め、遣隋使を派遣して隋の社会制度や学問を輸入したのである。そうすると、聖徳太子は馬子の投影であって、後の乙巳(いっし)の変で蘇我氏から政権を奪い取った藤原氏の正当性を高めるために、蘇我氏を悪徳一族としたという説も説得力がある。つまり、馬子の実績は無視するわけにはいかないほど大きいので、それを聖徳太子という人物が実践したことにして、馬子を聖徳太子の政敵に位置付けたわけである。(聖徳太子架空説、Wikipedia。)

このように、蘇我氏は徐福系葛城氏の系統で、海部氏と婚姻関係にある一族である。故に、聖徳太子が実在していたならば父方が海部氏直系、母方が海部氏との婚姻関係の直系、ということになる。

母の穴穂部間人皇女の“間人”的“ハシ”は同音のペルシャを意味する“波斯(はし)”で、“間人=波斯人”はペルシャ人を意味するが、確かに徐福系はペルシャ系十支族である。これは、邪馬台国時代の海部氏・徐福系の関係の再現とも言える。そして、この邪馬台国時代の再現を暗示しているのが、聖徳太

子と推古天皇の関係である。すなわち、大邪馬台国の巫女女王トヨと男王崇神の関係である。では、その関係を見てみよう。

5：アメタリシヒコ

(以下は<日本の真相 5>の記載をベースとしているが、修正している箇所もある。)

推古天皇の時代、隋書に登場する倭王は“アメタリシヒコ”である。しかし、この時代にそのような諡号の天皇はない。第5代・孝昭天皇の皇子、天足彦国押人命（アメタラシヒコクニオシヒトノミコト、生没年不詳）が名称的に該当するが、かなり年代を遡る。では、このアメタリシヒコとは誰なのか？隋はAD581年に建国されて618年まで続いたが、隋書の記述は次のようになっている。

“開皇二十年、倭王姓阿毎、字多利思比孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕。”

“開皇 20 年 (AD600 年)、倭王、姓は阿毎 (アメ、アマ)、字は多利思比孤 (タリシヒコ)、号は阿輩雞彌 (アハキミ、オオキミ)、遣使を王宮に詣でせる。”

つまり、倭王アメタリシヒコとは AD600 年の時点での倭王である。この時に即位していたのは、正史に於いては第33代・推古天皇 (AD554~628 年、即位 592 年) である。推古天皇は繼体天皇の孫の世代に相当し、父方の血統は海部氏、母方は海部氏との婚姻関係の蘇我氏で、聖德太子と同じ血統である。

アメタリシヒコは“ヒコ=彦=日子”を冠するので男王であり、推古はトヨ以後、初の女帝だから該当しない。しかし当時、本来の倭王としては、外国からの使者に対しては接見しないのが普通だった。そして、海部氏が大王となつて以来、大陸の列島に対する認識として、倭王はアメ=アマー族だった。それがこの時代にも続いていたことを、隨書は示している。これは崇神・トヨの時代以降、政体は纏向で葛城氏と尾張氏が、國體はヤマトの玄関たる丹後で海部氏が大陸との交易を担っていたことからすれば、当然ではある。

すなわち、推古天皇の時代の外交儀礼もこのような位置付けとされ、推古天皇がアメタリシヒコに該当しなくとも、アメタリシヒコが存在していなかったことにはならない。だから、アメタリシヒコは推古以外の、アマー族=海部氏系の血を引く男性高官である。それに相当する重要人物は、推古と血縁関係にあり、摂政となって実際の政治を司っていた聖德太子が最有力候補となる。この関係はまさしくトヨと崇神の関係であり、遡れば卑弥呼と補佐していた男弟の関係でもある。すなわち、海部氏の邪馬台国の再現である。

あるいは崇神が葛城氏系で、ここでもその再現と見るならば、アメタリシヒコは葛城系の蘇我氏、すなわち、蘇我馬子と見ることも可能だが、アメタリシヒコは海部氏系の大王である第5代・孝昭天皇の皇子・大倭帶日子国押人命（オオヤマトタラシヒコクニオシヒトノミコト）を思わせる名で、しかもアマー一族であることからすれば、やはりアメタリシヒコは海部氏系の血を引く男性高官と見なす方が妥当である。

推古は海部氏の王権委譲後、大王＝“天皇”が男系万世一系とされて以来の、初の女帝である。それは、皇統の危機故に、成されたことである。だからこそ、女王を立てて統一王国が成された時代を手本とし、それを真似て危機を救おうとした。故に、「古（いにしえ）を推し量る」という意味で、“推古”とされた。また、推古の和風諡号は豊御食炊屋姫尊（トヨミケカシキヤヒメノミコト）だが、トヨは邪馬台国の女王トヨ、豊受大神のトヨで、ミケは神饌で、食を司る豊受大神を暗示する。

そして、聖徳太子は豊聰耳（トヨトミミ）とも言われるが、トヨは女王トヨ、豊受大神のトヨで、御神酒と書いて「おみき」と読むように、ミミは「神々」の意味で、新たな祭祀が始まった、統一王国の大邪馬台国を暗示する。

また、海部氏最後の大王タケフルクマが王権委譲した代償として、最も徳が高い第16代・仁徳天皇とされ、世界最大級の墳墓が造営され称えられたが、その“仁徳”に対応しての“聖徳”である。ならば尚更、アメタリシヒコは馬子ではなく、國體を担っていた海部氏の統領が投影された聖徳太子と言えよう。当時の日本の表玄関は日本海側であり、そこを統治していたのは王権を委譲させられたとは言え海部氏だから、外国からの使者は、表玄関の統治者に謁見するのが当然と言える。

さて、このように推古天皇を補佐した海部氏系の統領（＝王）、聖徳太子は数々の立派な業績を残し、正史の系図的にも天皇の皇子なのだが、何故か、一族はその後の太子の皇子、山背大兄王（ヤマシロノオオエノオウ）の時代に、血縁関係である蘇我氏によって滅ぼされてしまった。この不可思議さは何なのか？

6：山背大兄王

聖徳太子一族の滅亡は、蘇我氏どうしの権力闘争説が有力である。（以下、Wikipediaより。）

- ・皇極紀に依ると、推古天皇が病死後に後継問題が発生し、蘇我氏の庶流、境

部摩理勢（サカイベノマリセ、馬子の弟もしくは従弟）らは山背大兄王を擁立した。その結果、蘇我蝦夷の擁立する田村皇子らと皇位を争うが、蝦夷から山背大兄王に対して自重を求める意見をされたこともあり、皇位は田村皇子が継承することとなり、AD629年に即位（＝舒明天皇）した。

だが、蘇我氏の実権が蝦夷の息子の入鹿に移ると、入鹿はより蘇我氏の意のままになると見られた古人大兄皇子（フルヒトノオオエノミコ）の擁立を企て、その中継ぎとして第35代・皇極天皇を擁立した。このため、山背大兄王と蘇我氏の関係は決定的に悪化した。

皇極天皇2年11月1日（AD643年12月20日）、ついに蘇我入鹿は兵に斑鳩宮の山背大兄王を襲撃させたが、王らは生駒山に逃亡した。王の家臣が「東国に難を避け、そこで再起を期して入鹿を討つべし」と進言するも、王は戦闘を望まず、結局、生駒山を下りて斑鳩寺に入り、11月11日（12月30日）に妃妾など一族はもろとも首をくくって自害した。蘇我蝦夷は、入鹿が山背大兄王を殺害したことを聞き、激怒した。

蘇我入鹿の軍勢に囮まれた山背大兄王は生駒山に逃れるが、一族郎党を率いて斑鳩に戻り、蘇我氏によって自害させられたのである。山背大兄王の母は蘇我馬子の娘、刀自古郎女（トジコノイラツメ）で、入鹿とは従兄弟に当たるので、蘇我氏の内紛劇ともとれるが、そのために、天皇家の血を引くはずの山背大兄王の一族が滅亡させられたのは異常なことである。更に、この惨劇を目撃したはずの法隆寺の近辺には、これほどの大事件であったにも関わらず、山背大兄王を葬った痕跡がまったく無く、その墓も不詳である。

皇統危機の中継ぎとなった聖徳太子は、先にも見たように海部氏系である。海部氏は、タケフルクマが秦氏に王権を委譲して以降、鬼などとして封印されることとなった。言わば、海部氏系の聖徳太子は危機を救ったリリーフなので、お役目が済んだら、再び消えて頂かなければならない。だから、その皇子は皇族とされるにも関わらず、わざわざ“生年不詳”とされ、海部氏系のかつての領地を暗示する“山背”を冠する皇子を創作し、消えて頂いたのである。あるいは、皇子は実在したものの、一族ごと消されたことにされたのである。（つまり偽装薨去！）このように考えれば、辻褄も合う。故に、墓も不詳、とされているのである。

以後の歴史を振り返っても、このような“不慮の死”を遂げた者は怨靈として祟り続けるのが定番であり、故に、神として丁重に祀って鎮め、その靈力によって国家安泰を祈願するようになった。これ以前の出来事でも、秦氏への王権委譲の際、出雲族の間で兄弟間の殺人事件が起きたが、その犠牲の御靈は出

雲大社にて今でも格別の待遇で祀られている。しかし、“首をくくって自害した”ハズの無念の山背大兄王には、そのような形跡すら無いので、聖徳太子－山背大兄王一族の滅亡は辻褄が合わず、信憑性が極めて疑わしい。

こうなると、権力の亡者とされている蘇我氏のイメージもまた、見直す必要がある。前述のように蘇我氏もまた、海部氏と深い繋がりのある一族であり、聖徳太子には、蘇我氏も絡んでいるからである。

*偽装薨去

國體に関わる者たちにしばしば見られる偽装死のこと。亡くなったことにし、実は他の場所で別人物として特務を執行したりする。落合完爾氏の一連の著書に詳しいので、詳細はそちらをご覧頂きたいが、この件に於いては、危機を救った後は歴史の表舞台から消えて頂く、ということ。昔は写真など無く、まして宮廷に関わることなど、部外者が知る由も無い。歴史書を記載する側＝歴史を創る側（ここでは藤原氏）が記載した内容こそが、表の歴史となる。

7：乙巳の変（<日本の真相4><皇位継承問題－詳細>）

蘇我氏の宗家は乙巳の変（AD645年7月10日）で滅ぼされる。乙巳の変は、中大兄皇子（第38代・天智天皇）と中臣鎌足（藤原鎌足）らが共謀して蘇我入鹿を暗殺し、その父の蝦夷を自害させて蘇我氏宗家を滅ぼしたクーデターであり、山背大兄王一族を滅亡させたとされる入鹿一族の滅亡である。これについては、多くの疑惑が挙げられる。

- ・乙巳の変に続く大化の改新が歴史家によって評価の対象にされたのは遅く、幕末から明治期にかけてと、かなり大きな時代ギャップがある。
- ・蘇我入鹿暗殺のタイミングが三韓朝貢の儀の最中だが、当時の常識として、外交儀式の最中にクーデターは絶対に起こさない。何故なら、外交使節に対して、国が内紛中で攻め込むのに絶好の機会、と宣伝することと同義で、極めて危険なことである。また、仮に三韓朝貢が暗殺者の虚構ならば、外交政策の中心人物である入鹿が気付かないはずがない。
- ・暗殺の場面は、常識的には考えられない状況である。本来、朝貢の儀に参内せねばならない中大兄皇子は、自ら長槍を持って隠れていた。宮中の大極殿は公の場としては最も神聖なる場故に、穢れは最も忌み嫌われるが、そのような

神聖な場で中大兄皇子自身が武器を持ち、飛び出して入鹿を斬りつけた。死という最大の穢れが皇族の手によって実行されたわけである。驚いた皇極天皇は中大兄皇子に訳を聞くと、入鹿が皇位を奪おうとしていることを述べた。それを聞き、天皇は女性にも関わらず、突然の惨劇に驚いたり卒倒することもなく、何も言わずに直ちに宮殿の奥に姿を消した。

- ・蘇我蝦夷、入鹿親子は死んだが、従兄弟の蘇我倉山田石川麻呂は大化の改新後に右大臣になり、蘇我氏は無視できない勢力を保っていた。蘇我氏が本当に不要ならば、この様な措置はあり得ない。
- ・朝廷は蘇我氏の勢力圏の飛鳥から難波宮に遷されたが、蘇我氏の勢力圏である飛鳥に再び戻った。天智天皇の時代に飛鳥から近江へ朝廷は遷されたが、壬申の乱で大海人皇子（第40代・天武天皇）が勝つと、再び朝廷は蘇我氏縁の飛鳥に戻り、遷都としてはおかしな動きをしている。（これに依れば、天智天皇＝反蘇我氏勢力、天武天皇＝親蘇我氏勢力が伺える。）
- ・近年発掘された蘇我氏一族の邸宅跡など関連遺跡を見ると、蘇我氏は自らが盾となって天皇家を守ろうとする体制が明らかとなってきた。

宮中に於ける重要な外交の場だというのに、天皇の皇子が天皇の側近を殺害したという前代未聞のクーデターは、当時の状況を考慮するならば、やはり辻襷が合わない。それに、このクーデターがきっかけで皇極天皇は同母弟の輕皇子（=第36代・孝徳天皇）に譲位したものの、孝徳天皇はしばらくして崩御したため、第37代・齊明天皇としてAD655年に飛鳥板蓋宮で再び皇位を継承し、史上初の重祚（ちょうそ）となった。とは言え、政治権力はクーデターに成功した中大兄皇子が握ったのである。この重祚は蘇我系と反蘇我系の皇位継承者争いで、神に通じることができる「妹（いも）の力」を有する皇極天皇を重祚させて齊明天皇とし、非蘇我系の始祖として仕立て上げることが目的だったと考えられる。

律令制度が本格的に始動したのは大宝律令からであること、大化の改新について記載されている日本書紀は鎌足の子である藤原不比等によって編纂を命じられていることから、実際に施行された大宝律令と重ね、不比等が父親である鎌足の功績を高く評価させるために“乙巳の変、大化の改新”という大事件を虚構した、と考えると辻襷が合う。不比等（フヒト）は史人（フミト）でもあり、以後に影響する表の歴史の土台を創ったのである。“等しく比べる者無し＝

並ぶ者無し”を意味する不比等はそういう意味でもあり、正史に於ける年代・人物操作もその 1 つである。そして、鎌足も元は中臣氏ではなく、中臣氏に背乗り（はいのり）した。（本来の中臣氏は大中臣氏へ。）

このようなことから、鎌足は百済の王子、豊璋（ホウショウ）であるという説を関裕二氏は唱えている。

- ・通説（Wikipedia）

日本書紀に依れば、扶余豊璋（フヨホウショウ）の渡来時期は舒明天皇 3 年（AD631 年）とされる。その時、豊璋は日本と百済の同盟を担保する人質であった。

AD660 年、唐・新羅の連合軍が百済を滅ぼしたという知らせが届くと、倭国の大兄皇子は倭国の総力を挙げて百済復興を支援することを決定し、AD662 年 5 月、百済に派兵した。豊璋と倭軍は百済を復興すべく反乱を起こした鬼室福信（キシツフクシン）と合流し、豊璋は百済王に推戴されたが、次第に実権を握る鬼室福信との確執が生まれ、AD663 年 6 月、豊璋は鬼室福信を殺害した。それ故、百済復興軍は著しく弱体化し、結果、倭国・百済連合軍は唐・新羅軍に大敗した。（白村江の戦い。）豊璋は唐の都に連行され、地方に流刑にされたとも伝わる。

- ・豊璋=鎌足説（関裕二、『古代史の秘密を握る人たち』、PHP 研究所。）

<http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=193608>

- ①鎌足は歴史に唐突に現われ、白村江の大戦の最中、中大兄皇子こと天智天皇の右腕であるはずなのに、突然行方をくらました。
- ②日本書記に依れば、鎌足出現の直前に百済皇子・豊璋が AD631 年に人質として来日した。AD660 年に百済が一旦滅亡した後、王朝復興のために百済から呼び戻され擁立された。そして、白村江の戦いで百済王朝が滅亡後、豊璋も行方をくらました。豊璋が百済に舞い戻っていた頃、鎌足に関する記述が無い。
- ③日本書紀に依ると、冠位「織冠」を与えられたのは鎌足と豊璋の二人だけである。
- ④壬申の乱で百済派（天智天皇の息子である大友皇子）が敗北し、新羅派（天武天皇）が王権奪取して以後、藤原不比等は完全に干されている。

白村江の戦い後、百済の豊璋王は高句麗へ逃亡たともされ、百済は滅亡し、百済の遺民や王族が次々に日本に逃れて来た。天智天皇は AD665 年、百済から逃ってきた男女約 400 人を近江国神前郡に集住させ、彼らに田を与えた。このように、天智天皇と百済との関係は極めて深い。（その代わりに反新羅であるが、

対する天武天皇は親新羅である。)

このような重要な役割を果たし、百濟最後の王である義慈王（在位 AD641 年～660 年）の王子でもあるが故に百濟王にも推戴された豊璋だが、何故か、生没年不詳である。ここで、朝鮮半島の歴史を見てみよう。（以下、＜日本の真相 2 ＞より。）



BC2 世紀頃、東北アジアにツングース系騎馬民族「扶余、夫余」が出現した。その大王の名が「解夫妻（ヘブル）」であり、当然ヘブライのことである。つまり、扶余族は失われた十支族の流れであり、そこに原始キリスト教徒が合流していた。当時、東北アジアに広がっていた騎馬民族はまとめて“秦人=流浪の民”と支那から呼ばれていた。つまり、彼らこそ本来の秦氏である。

古代朝鮮の歴史を記した『三国史記』の中の『百濟本記』には、百濟の歴史が記されている。その建国神話では、解夫妻の息子、朱蒙（シュモウ）には二人の息子があり、兄が沸流（フル）、弟が温祚（オンソ）と言った。彼らは一族を率いて南下し、フルは海側に、オンソは内陸に国を造った。オンソの国は百濟へと発展したが、フルの方は土地がやせて衰退した。これを恥じ、フルは自殺した。だが『百濟本記』の序文には、始祖はフルであるとも記されている。

そのフルの行方がまったく解らないのである。古代の半島では、行方不明だったり死んだことになっているのは、他の国へ行ってしまった場合が多い。

百濟王家の姓は解氏と真氏であり、出自は扶余族である。つまり、百濟王家は扶余族=秦氏の流れである。

また、解氏は繁栄して百濟を建国したが、真氏は滅びたとされる。よって、

解氏=オンソであり、真氏=フルである。この解氏の“解”は、解夫妻の“解”でもある。

南下しての海側は東側と南側があるが、東側は海部氏建国の新羅があるので、フルの造ったとされる国は伽耶である。

扶余族は高句麗から分かれたツングース系騎馬民族で、二支族と合流した十支族の王家の1つ、ガド族である。その大王が列島に渡来し、海部氏に婿入りして王権を委譲され、応神天皇となった。すなわち、行方が解らないフルこそ、応神天皇である。この“フル”に因んで、王権を譲った側の大王の名は“タケフルクマ”とされ、仁徳天皇とされた。“タケ”はヤマトタケル、タケミナカタなど“猛々しい”意味で、“クマ”は古語で“神”を意味する。

また、真氏の“真”は、大王の印として持っていた黄金のマナ（眞名）の壺に由来するが、婿入りの証として、海部氏に手渡された。その海部氏の籠神社の奥宮は、眞名井神社である。

籠神社の伝承に依ると、眞名井神社の湧水は天村雲命が高天原から天神の使われる水をコハクの鉢に戴いて降臨し、それを眞名井の湧水に和（やわ）したとされるが、そのコハクの鉢とは、秘伝では黄金の鉢とされる。つまり、マナの壺の暗示である。

すなわち、改宗して騎馬民族となった扶余族=十支族系に原始キリスト教の二支族（狭義の秦氏）が合流し、日本を目指して渡來した経路の途中に建国したのが、高句麗と百濟なのである。

ここで、豊璋は『三国史記』では扶余豊、『旧唐書』では扶余豊と言われることからすると、豊璋は明らかに扶余族=秦氏の流れである。そして、百濟の王子ということからすれば、豊璋は百濟を建国した扶余族=秦氏の解氏の血統と言える。

対して、滅びたとされる真氏=フルは渡來し、マナの壺を和平の印として海部氏に入り婿し、応神天皇となった。これにより、海部氏から秦氏へ、邪馬台国から大和朝廷への“國譲り”となったわけである。この時の王権委譲させられた海部氏の大王はタケフルクマノスクネで、若狭の木津高向宮で海部の姓を賜ったことにされている。古事記には、応神が幼少の頃に若狭の角鹿（つぬが：後の敦賀）にて、御食津神（みけつかみ：食を司る神の一般的な言い方）と名前を交換した、という記載がある。海部氏の祀る最高神は御食津神の根源たる豊受大神だから、この古事記の記載は、海部氏から応神一族への王権委譲を暗示していると言える。それがまた、タケフルクマノスクネの“フル”でも暗示

されている。つまり、“タケフルクマ”に相当する海部氏の大王が、本来のフルである応神と名前を交換することにより、“タケフルクマ”と名乗らされるようになった、ということである。“タケ”は“荒々しい”、“クマ”は古語で“神”的意味だから、応神の和魂に対する荒魂という関係にもなっている。

なお、海部氏の祖は新羅を建国したが（これについては後述）、ここでは、正史に於いて応神の母とされる神功皇后の祖先は新羅の皇子（＝天之日矛、アメノヒホコ）の子孫、とされることである。日本書紀の神功皇后紀では、神功皇后を『魏志倭人伝』に登場する卑弥呼に比定し、神功皇后摂政39年（AD239年）の部分に『魏志倭人伝』の記事を引用している。（『神話のおへそ』『日本書紀』編、神社本庁監修、扶桑社。）卑弥呼は実際、新羅を建国した海部氏の祖先だから、正史に於いて神功皇后が新羅の皇子の子孫とされることは、神功皇后のモデルは卑弥呼であり、卑弥呼は新羅を建国した海部氏の一族であることを暗示している。そして、応神が海部氏に入り婿することにより、卑弥呼は応神にとって系図上の母的存在となったということであり、以後続く天皇の血統に、系図的に卑弥呼の血統を取り入れたということである。

更に、神功皇后は神託に因り新羅に遠征した。この遠征と新羅建国の目的は、1つは鉄鉱石であり、もう1つは金である。半島は砂金もよく採れた。縄文海人は金の管理をしており、大陸側の金の窓口は半島の羅津（らじん）だが、羅津に至る経路を確保するには、半島に足がかりとなる国を築いておくことが得策である。その半島との交易を取り仕切っていたのが、弥生海人の大王家・海部氏である。このように、新羅は海部氏の祖が建国に関わる国で、海部氏・尾張氏を暗示する。（<縄文海人（あま）と弥生海人>）

このように半島の実情を見るならば、豊璋は秦氏の中の中核的人物の一人で、海部氏の新羅に対抗するために百濟とヤマトの間を取り持った人物と言え、故に半島に於いては生没年不詳とされ、ヤマトの正史に於いては歴史の表舞台に登場するようになった秦氏の中核である藤原氏の祖とされる鎌足とオーバーラップするような書き方が成されているのである。やはり関氏が言われるように、鎌足＝豊璋と見なすことは辻褄が合う。

さて、乙巳の変に於ける入鹿の暗殺だが、前述の応神とタケフルクマの「国譲り」まで話を遡ると、興味深い事実が見えてくる。繰り返しになるが、それは、応神（当時はまだ皇子）が御食津神と名前を取り替えた話である。御食津神は皇子の夢に登場し、名を取り替えたいと仰せになったわけだが、それを承諾した皇子に対して、御食津神は「翌朝、浜に行けば、名を取り替えた事への

贈り物を与える」と仰せになった。翌朝、皇子が浜に行ってみると、鼻の傷ついたイルカが一面に打ち上げられていた。それを見た皇子は「私に御撰（みけ：神に差し上げるお食事）を与えてくださいました」と神に申し上げた。

現在でも一部の地域ではイルカを食糧とするが、古のイルカ漁は銛で鼻を突いて捕らえたので、イルカの鼻は傷ついて血が流れていた。（このイルカの血になぞらえて、その浜は血浦と名付けられ、それがツヌガとなり、現在の敦賀となつたという。）銛で突かれて血まみれになつたイルカはタケフルクマ＝海部氏から応神＝秦氏への国譲りの暗示で、蘇我イルカが長槍で切りつけられて暗殺されたことによって鎌足＝藤原氏＝秦氏の台頭となつたことは、いずれも同じ構造ではないか！

すなわち、**入鹿暗殺**という大事件は、国として出版した正史はまだできていなかつたものの、過去の“歴史的事実、史実”になぞらえて百濟系渡来秦氏によつて作成された“虚構”であり、それを知る手がかりとして、後に編纂された正史に御食津神と応神の名前の取り替えやイルカの話が入れられたのである。

海部氏が王権委譲後に隠されたように、広い意味で海部氏と同族の蘇我入鹿は殺害されたのではなく、同様に裏に隠され、その傍系が天皇家を補佐してきたというのが真相、と考えるのが妥当である。山背大兄王一族を滅亡させた“創作”と同様に。この、隠されて裏から補佐するというのは、縄文海人と同じだが、海部氏は弥生海人である。

蘇我氏は前述のように徐福系の葛城氏であり、徐福系は容易に王権委譲に賛同したので厚遇された。

海部氏は縄文王家と和平を結んだが、大王家は海部氏に遷つたので、それを快く思わない縄文海人系が居てもおかしくはない。彼らが秦氏に協力して裏から徐福系と手を結んでいたならば、秦氏への王権委譲の際、徐福系が容易に賛同したことは、辻褄が合う。

なお、聖徳太子を補佐したとされるのは秦河勝で秦氏だが、聖徳太子の補佐という最重要の要職に就いていたのにも関わらず生没年が不詳というのは、やはり真相が知られてはよろしくない一族であることを暗示する。すなわち、隠されて裏から補佐する縄文海人に協力した徐福系秦氏の暗示であり、蘇我馬子がモデルなのである。

これに倣い、乙巳の変の後も、蘇我氏の傍系が天皇を補佐した。いや、**乙巳の変**が“創作”された後は、蘇我氏宗家は隠され、その傍系が天皇を補佐した。縄文海人に支えられ、改宗した徐福系秦氏が原始キリスト教系秦氏の大王を支えた構造である。

物部氏の文書である先代旧事本記には、蘇我入鹿に物部の血が入っていることを誇らしげに記載している。（<日本の真相5>）

“小治田（おわりだ） 豊浦宮に御宇天皇（アメノシタシラシメシシスメラミコト）の御世に参政（まつりごとあづかり）と為りて神宮（かみつみや）を斎奉る。崇我嶋大臣（ソガノシマノオオオミ＝馬子）の妻と為りて豊浦大臣を生む。名を入鹿連公と言う。”

つまり、物部氏にとって、蘇我氏はとても重要な人物であり、敵対するような関係ではないことを示唆しており、日本書紀に於ける創作が伺える。そして、ここでも“豊浦宮”“豊浦大臣”など“トヨ”と“豊受大神”を示唆する“豊”を冠し、更に、“小治田”という地名で尾張氏との深い関係を暗示している。

やはり乙巳の変に関しては、<皇位継承問題－詳細>に記載されているように、皇極＝齐明天皇の皇子である中大兄皇子が様々な理由から不満を持ち、蘇我政権と敵対する鎌足らに協力してクーデターを起こした、というよりも、乙巳の変という虚構のクーデターを起こしたとされる鎌足と中大兄皇子はむしろ同族の秦氏であり、妹の力を最大限発揮できる皇極天皇を重祚させて齐明天皇として非蘇我系の始祖とさせ、その系図に背乗りし正史を改竄した、と見なすのが妥当である。つまり、武烈天皇後に一旦絶えてしまった秦氏系天皇を再び即位させるということが天智天皇の即位であり、虚構である乙巳の変の本質だと考えられる。

このように、聖德太子に関わった蘇我馬子直系＝蘇我氏宗家は、海部氏系の聖徳太子が隠されたのと同様に、隠されたのである。前述のように、徐福系は“月”で暗示される始皇帝の血縁も含む桂木氏＝葛城氏だが、容易に王権委譲に賛同した。つまり、古代に於ける政権委譲は祭祀の委譲であり、物部神道から秦氏の原始キリスト教信仰への改宗である。そのため、秦の始皇帝の末裔である弓月君（ユヅキノキミ）が応神天皇14年に127県の民をつれて百濟から渡来し（『新撰姓氏録（しんせんしょうじろく）』）、秦氏の祖とされたことにより真相が隠されたが、百濟王家は扶余族＝秦氏の流れである。また、アマテラスやスサノオと同時に誕生したツキヨミ（月読命、月読尊）は、その後ほとんど逸話が無いことも、“月”に関わる葛城氏＝蘇我氏の真相が隠されたことを暗示している。そして、蘇我馬子、聖徳太子と同時期に、仏教に関わった物部守屋の真相も隠されたのである。

8：物部守屋と四天王寺

話は前後するが、蘇我稻目の時代に、物部尾興（オコシ）らによって仏像が破棄された。その後の馬子の時代に、排仏派の物部守屋と中臣勝海が仏教導入の是非をめぐり、馬子と争った。その際、聖徳太子が四天王像を彫って戦勝祈願し、馬子も寺塔を建立して仏法を広めることを誓い、最終的には馬子らが勝利して本格的に仏教が導入されたが、太子は仏教も神道も厚く信仰した。

蘇我氏は本来物部氏だから、この話はいわば物部氏の内紛話である。そこに、表向きは秦氏とされる聖徳太子が関わっている。

また、馬子の妻は守屋の妹とされるが、そうすると、馬子と守屋の戦いは義兄弟同士の戦いでもある。そして、聖徳太子縁の四天王寺は、守屋に関わる物部系一族の末裔たちが公人（くにん）となり、今でも四天王寺に関わる様々な仕事に就いており、四天王寺の大祭の聖靈会には欠かせない存在となっている。仮に守屋の怨霊鎮めだとしても、ここまでして最大の敵を連綿と護り続けるのだろうか？むしろ、四天王寺を護っているのは、守屋に関わる物部系一族と見るべきではないか？

モリヤと言えば、諏訪の守矢氏が思い浮かぶ。守屋との関わりがあるかどうかは別として、諏訪大社で祀られる建御名方神（タケミナカタノカミ）は、最後まで国譲りに抵抗し、最終的に諏訪の地に追いやられた。これは、形として、守屋が敗れたことと同義である。（ここでは国譲りではなく仏教導入の是非だが、古代、祭祀は国の政の根幹に関わることだから、宗教＝祭祀が変わるということは、一種の国譲りである。）

ならば、仏教を原始キリスト教の隠れ蓑として利用しようとした秦氏にとって、これもまた秦氏を表立って出すことなく、物部氏の内紛話ということにした創作と言えよう。

この守屋に関わるのが、大伴細入（オオトモノサイニユウ）＝杉原斎入である。江戸中期に成立した甲賀に伝わる忍術伝書『忍術応義伝』に依れば、彼は聖徳太子が守屋の動向を探るために使った志能備（しのび＝忍者）とされ、聖徳太子こそ、忍者集団を組織したとも言われる。

（<https://ninja-yakata.net/index-history.html>）

しかしながら、忍者の根源は縄文海人にあり、彼らには、自らは隠れ“戦わずして勝つ”という戦法がある。これは、いわゆる“孫子の兵法”だが、古蜀由来の縄文海人から呉へと伝わったものであり、典型的な縄文海人である和田橘一族の“橘家の兵法”なども、この類である（<縄文海人と弥生海人>）。つまり、聖徳太子の背後には、縄文海人の存在がある。

なお、物部守屋討伐前、聖徳太子は信貴山でも戦勝祈願をしているが、その時、毘沙門天王が出現して必勝の秘法を授かったという。その日は寅年、寅日、寅の刻であったとされる。寅は封印された豊受大神＝ウシトラノコンジンとも見なせるが、トーラー＝モーゼ五書であるとするならば、神の御加護によって戦勝する、という意味合いである。そして、聖徳太子は大工の神様として崇められるが、後に述べる広隆寺の講堂には、五芒星の奉納額がある。**五芒星**と言えば、一般的には道教の陰陽五行思想を表しているとされるが、この場合は“モーゼ五書”を暗示する。

以上、聖徳太子とそれに関わる人物には海部氏・尾張氏、徐福系が隠されており、更に狭義の秦氏や縄文海人も隠されている。それは、この国の形成の根幹に関わることでもある。故に、聖徳太子は謎多き人物とされているのである。そして、神武天皇＝天村雲命から始まる本来の皇統である海部氏・尾張氏の大王を暗示する広隆寺の聖徳太子像には、陛下が即位式に召されたのと同じ黄櫨染御袍が着せられ、“さりげなく”敬意が表されるのである。

- ・海部氏・尾張氏→大王。
- ・徐福系→蘇我氏の影響。
- ・狭義の秦氏→イエスの逸話、大工の棟梁。
- ・縄文海人→裏から支えること、忍集団の創設。

9：広隆寺の聖徳太子像

ここまででは、系図と聖徳太子に深く関わる蘇我氏の面から、聖徳太子は海部氏系であるとした。ここからは、太子ゆかりの広隆寺や法隆寺から考察してみよう。

海部光彦氏の示唆の中で重要なのは、黄櫨染御袍を着せられる聖徳太子像と牛祭である。聖徳太子が、よく言われているような秦氏の大王ならば、現在の皇室もその流れなので、わざわざ即位の礼の後に黄櫨染御袍を着せる必要は無い。一般的には、聖徳太子には皇位継承権があったから、などと言われているが、ならば、他にも皇位継承権のあった皇子はいるので、聖徳太子だけを特別扱いしているのは辻褄が合わない。また、この黄櫨染御袍のことについては広隆寺の資料にも記載があり、隠されたことではないが、それをわざわざ物部氏トップの海部氏が言うからには、それなりの真相が隠されているわけである。

すなわち、**広隆寺**がかつて海部氏の領地であり、天皇即位後、聖徳太子像に同じ黄櫨染御袍が下賜されて着せられることは、聖徳太子が封印された海部氏

系統の大王だからなのである。

それを裏付けるのが、牛祭と同じく広隆寺に安置されている新羅様式の弥勒菩薩像であり、<日本の真相4><日本の真相5><縄文海人（あま）と弥生海人>をベースとして考察された<大嘗祭2>に詳しくまとめられている。だから、そちらを参照、とすることでも良いのだが、重複するものの、極めて重要な内容なので、以下に示す。（今回一部加筆あり。）

(1) 聖徳太子像

広隆寺は秦氏の拠点となっているものの、かつては海部氏の領地だった。また、広隆寺は秦の始皇帝の祖靈を祀ったとされるが、始皇帝の命（めい）で不老不死の妙薬を求めて渡來した徐福の一団は海部氏に婿入りして物部氏となり、中でも重要な一族は葛城氏となって、海部氏の兄弟分家である尾張氏と共にヤマトで祭祀を行っていた。その葛城氏の流れを汲むのが蘇我氏であり、蘇我氏は聖徳太子の時代、政権を支えた。

他に、広隆寺には国宝の弥勒菩薩半跏思惟像（みろくばさつはんかしゆいぞう）があるが、これは新羅様式である。新羅の建国には海部氏の祖の瓠公（ココウ）や脱解王（ダッカイオウ）が深く関わっている。（詳細は(3)で述べる。）

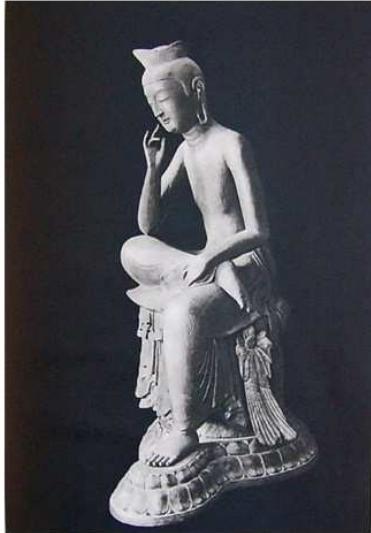
すなわち、**広隆寺の聖徳太子像**とは、邪馬台国の大王家たる海部氏を暗示するものであり、それに即位後の黄櫨染御袍と同じものを着装させることにより、大和朝廷の皇統の現皇室だけではなく、前大和朝廷の統一王国＝邪馬台国の大王家もまた、この国で維持されていることを暗示しているのである。

聖徳太子像



<https://www.pinterest.jp/explore/広隆寺/?lp=true>

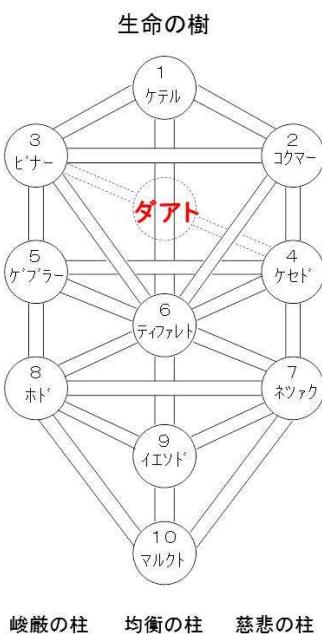
弥勒菩薩像



Wikipedia

この太子像は太子 33 歳の頃と伝えられており、第 33 代・推古天皇の“第 33 代”も同様だが、“33”は「生命の樹」の隠されたセフィラ「ダート」も含めたセフィロトとパスの数であり、「生命の樹」を暗示する。

その「生命の樹」はイナンナが掛けられて死に“復活”した木であり、イナンナが原型のイエスも関わり、イエスは 33 歳で十字架刑に処せられたという逸話もある。確かに、聖徳太子は厩戸の前で生まれたとされ、イエス誕生の逸話とそっくりである。また、弥勒菩薩はマイトレーヤーで、将来出現するとされる弥勒=救世主であり、これもイエスの再降臨と同義である。また、太子を支えた蘇我氏にも、わざわざ“我、蘇る”という字を当てているのも同義である。



マイトレーヤーは、古代ローマなどではミトラ神とされた。ミトラ神は“牛を屠るミトラ”というモチーフでしばしば描かれていたが、これはミトラが聖牛を殺したことにより、その体から豊穣の種子がほとばしり出たという神話に基づく。自ら屠った牡牛の体からあらゆる薬草や穀物、家畜、多くの生命が溢れ出た。脊髄は小麦に、血液は葡萄となり、尾は麦の穂となった。精液は月神が浄めてあらゆる種類の家畜を生んだ。そして、人間も生まれた。つまり、牛殺しのミトラ神は、あらゆる生命の創造者となった。(フランス・キュモン著・小川英雄訳、『ミトラの秘儀』、平凡社。)

これと類似した話が記紀にある。スサノオがオオゲツヒメを斬り殺し、その屍体から穀物が生まれた(古事記)、あるいはツキヨミがウケモチノカミを斬り殺し、その屍体から五穀と蚕、牛馬が生まれた(日本書紀)である。(すなわ

ち、スサノオ=ツキヨミ=ミトラ。)

元々、ミトラ神は古代インド・イランのアーリア人が共通の地域に住んでいた時代まで遡る、太陽神かつ契約の神だった。この地域の創造神は豊穣神イナンナであり、イナンナと双子であるウツは太陽神で律法の神だから、ミトラ神はイナンナとウツが合体したような神である。

(2)牛祭

このミトラ神の牛に関わる変わった祭りが牛祭である。平安時代、比叡山の恵信僧都が極楽浄土の阿弥陀如来を拝する願いを持っていたところ、広隆寺講堂のご本尊を拝めば良い、と夢のお告げがあり、常行念佛堂を建立し、念佛守護の神、摩吒羅神（マタラシン）を勧請して祈祷したのが始まりとされている。

明治以前は旧暦9月12日の夜半、広隆寺の境内社であった大酒神社の祭りとして斎行されたが、現在では、牛の調達が困難のため不定期開催となり、斎行される場合は大方、10月12日が目安のようである。（近年では1995年、2000年、2003年に斎行された。）

大酒神社は本来“大避神社”と書き、“大避”は漢字でダビデを意味するから、ダビデ神社とも言われる。

白衣装束に仮面を着け、紙を垂らした冠をかぶり、その頭巾には北斗七星を載いた摩多羅神（マタラシン）が牛に乗り、四天王と呼ばれる赤鬼・青鬼各2人が松明を持って先導し、広隆寺西門から出て行列する。東門より境内に入り、薬師堂の前の祭壇を牛に乗ったまま3周（4周？）した後、薬師堂前で祭壇に上り、厄災・退散を祈願する祭文を独特の調子で1時間ほどかけて読むが、参拝者がこれに罵詈雑言を浴びせる。祭文を読み終わると、摩多羅神と四天王は突然薬師堂内に駆け込んで終了となる。（以上、主に Wikipedia。）

言わば、牛を追いやる祭りだが、このマタラはミトラの転化であり、牛を犠牲として屠っていた物部氏にも通じる。摩多羅神は天台宗の本尊で、阿弥陀経と念佛の守護神ともされる神だが、仏典には登場しないし、記紀などにも登場しない正体不明の神である。しかし、ミトラの転化であるならば、ミトラ神は光明神であり、阿弥陀如来も光明神だから矛盾しない。

祭りでは摩多羅神の白い仮面、赤鬼・青鬼の鬼面が使われるが、同じく天台宗系の白蓮教（唐代三夷教の1つであるマニ教と弥勒信仰が習合したもの）では、過去仏=青陽会、現在仏=赤陽会、未来仏=白陽会という考えがあることからすると、過去は青、現在は赤、未来は白となる。つまり、白い仮面の摩多羅神は未来仏に相当し、弥勒は未来に出現するとされているから、摩多羅神は

弥勒=ミトラとなり、矛盾しない。

なお、白蓮教の創始は南宋で、南宋が始まったのは AD1127 年、牛祭が始まったのは AD1012 年で時代が合わない、という反論もある。しかし、白蓮教はマニ教と弥勒信仰が習合したもので、日本の大乗仏教は極めてマニ教的なものだから、基となる考えは南宋よりも古い時代から大陸に存在したと言え、弥勒信仰と習合した宗教として顕現したのが南宋時代なのであり、それ以前に日本へ考え方を伝わっていてもおかしくなく、矛盾を生じるものではない。

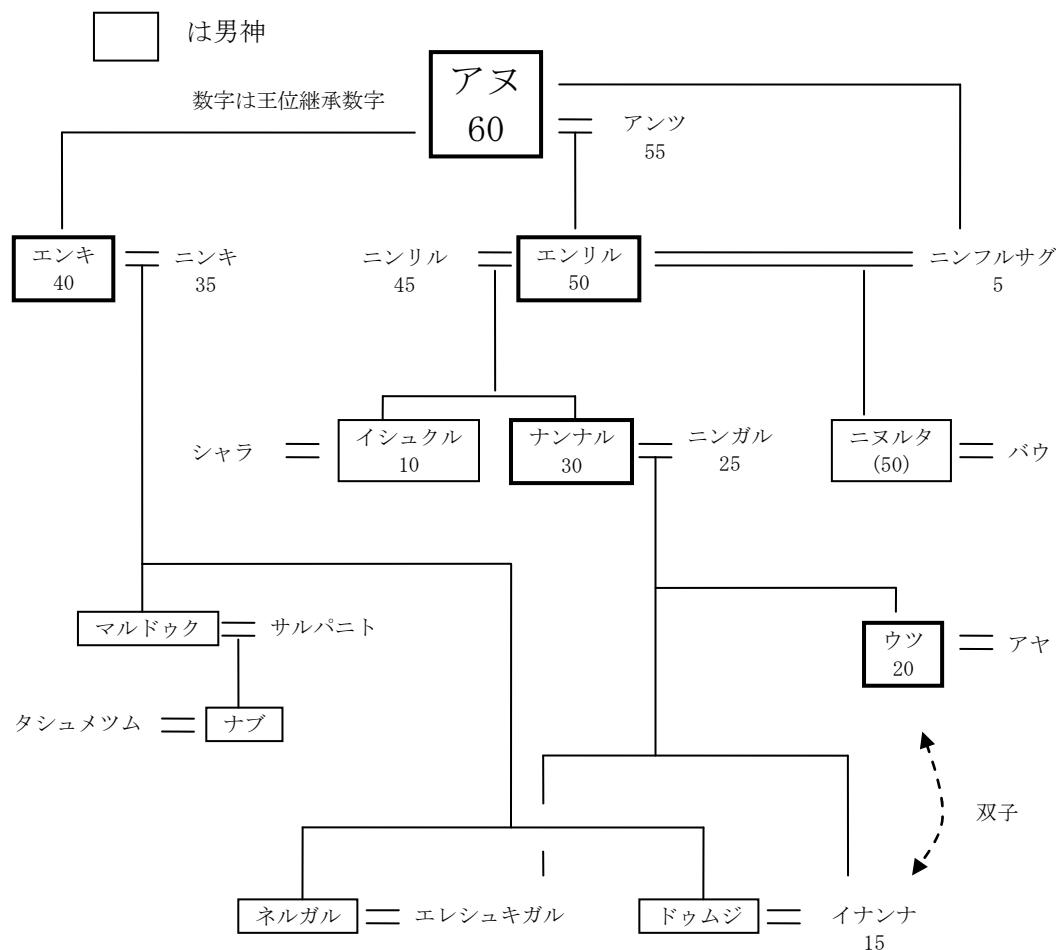
<http://kojiki.imawamukashi.com/05kosatu/05koryuji2.html>



<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/usimatur.html>

さて、この祭りでの主役は摩多羅神である。念佛守護の神とされているが、四天王に先導されている。四天王とは、帝釈天に仕え、須弥山（しゅみせん）の中腹にあるとされる四天王天の四方（東方の持国天、南方の增長天、西方の広目天、北方の多聞天）に住み、仏教を守護する四柱の神である。ペルシャのゾロアスター教に依れば、ミスマートラ=ミトラは千の耳と万の目を持ち、国家を護持し、生命力を司る神とされる。千の耳は多聞天、万の目は広目天、国家を護持することは持国天、生命力を司ることは增長天に相当するので、四天王はミトラを 4 つに分解したメルカバー（=男性、ライオン、雄牛、及び鷲の 4 つの顔を持つ神の戦車）と言える。

帝釈天は天主帝釈・天帝・天皇とも言われ、バラモン教・ヒンドゥー教・ゾロアスター教の武神インドラである。そのモデルはアッカドのイシュクルで、雷神・天候神・軍神故に、ギリシャではゼウスとなった。(イシュクルはエンリルの末息子。イナンナやウツの叔父であり、彼らととても仲が良かった。イナンナはバラモン教・ヒンドゥー教・ゾロアスター教の創造神である。) インドラとは、“強力な神々の中の帝王”を意味するので、天帝・天皇であり、最高神ゼウスである。そして、四天王が四方を守護するような役目でもあることから、帝釈天は陰陽道的に中心の黄龍に相当し、故に黄龍寺=広隆寺となる。ここでも例の如くシュメールの神々のご登場だが、“須弥山”はそもそもシュメールを意味する言葉である。



摩多羅神は牛に乗っているが、エンリル系は牛がシンボルである。そして、摩多羅神の頭巾には北斗七星が描かれている。北斗七星は天帝を守護する御者

とされるが、天帝の星は北極星で、天に於ける不動の星である。このため、しばしば言わるのが太陽に対する北辰信仰だが、北斗を冠する北斗神社（諏訪市）では、天御中主神を祀る。つまり、北斗七星が象徴するのは、天に於ける不動ということから、原初の最高神・天御中主神である。だから、帝釈天は天主帝釈・天帝・天皇となる由縁である。そして、天御中主神の光の側面が天照大神であり、太陽神的でもあるが故に、摩多羅神は日が昇る東門より境内に入る。舞台となっている薬師堂では女神の吉祥天像のような薬師如来像が祀られるが、「覚禪抄（かくぜんしょう、東密）」に於いて「胎藏大日如来と同体」と説かれており、大日如来は神仏習合の解釈では天照大神と同一視されているので、矛盾しない。

ここで重要なのは、四天王が鬼とされ、牛をも意味する摩多羅神が追いやられることである。鬼とされた牛をも意味する神が追いやられ、封印される。これは、ウシトラノコンジン＝良金神＝豊受大神の封印である！

アマテラスは太陽、ツキヨミは月をシンボルとし、スサノオは星をシンボルとするともされるから、北斗七星が示す天に於ける不動の星はスサノオの暗示とも言える。スサノオは八坂神社などでも牛頭天王とされ、神仏習合に於いては薬師如来の権現（ごんげん：仮の姿）とされるから、前述の摩多羅神が駆け込む薬師堂に薬師如来が祀られているのは、摩多羅神＝薬師如来＝牛頭天王＝スサノオと言える。

スサノオの元はシヴァ神で、その原型はイナンナであり、イナンナ＝豊受大神でもあるから、やはり追いやられる牛に乗る神は牛頭天王＝スサノオ＝豊受大神＝ウシトラノコンジンとなり、矛盾しない。この封印された豊受大神とは、単に豊穣の女神ということではなく、太陽女神である天照大神信仰の裏に隠された神、つまり、天御中主神のエネルギー的側面という意味となる。それが、地球上に於いては国常立神とも言われる。

また、シュメール文明が始まった時代、占星術の基準となる春分点は、黄道十二宮の金牛座にあった。つまり、この時から本格的な「神々」の概念も始まり、それが牡牛座に当たるため、最高神は必然的に牡牛の如く牛に喩えられたのである。

更に、始まりを意味するアルファベットは“A”だが、アルファベットの基はフェニキア文字であり、“A”はフェニキア文字の「アーレフ」だが、牛の意味がある。これも、「始まりの神」が牛として喩えられるからである。

そして、天御中主神は、日本に於ける「始まりの神」である。

以上、広隆寺は“復活”のイナンナが原型であるミトラ神＝弥勒菩薩＝救世

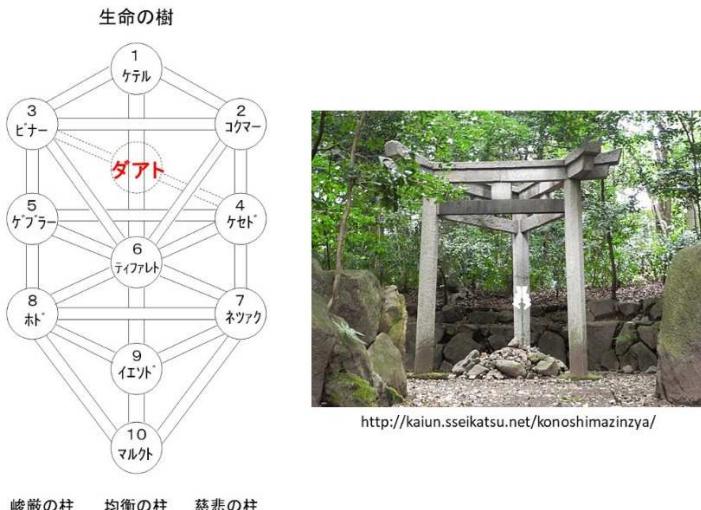
主をベースとする海部氏系の寺であり、その聖徳太子像に即位礼で陛下がお召しなったのと同様の黄櫨染御袍が新しく調進され、下賜されて着装されてきたのは、邪馬台国大王家=海部氏系の大王が封印されたことを暗示している。ミトラ神は太陽神とされ、復活の神でもあるが故に、太陽神ウツと“復活”的イナンナの習合である。

そして、**広隆寺の牛祭り**はウシトロノコンジン封印の再現で、これも海部氏が祀る神=豊受大神の封印を暗示するが、その真相は、天照大神信仰の裏に隠された豊受大神=天御中主神のエネルギー的側面であり、実は天照大神と合わせて、天御中主神信仰を暗示しているのである。

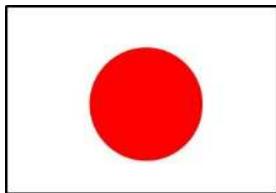
これを裏付けるが如く、**広隆寺**の近くにある木嶋坐天照御魂（このしまにますあまてるみたま）神社には3本柱の鳥居があり、天御中主神を祀る。その名が示す如く、天照御魂とは天御中主神の光の側面である。また、境内の北西に“元糺（もとただす）の池”という神泉があり、かつては湧水が豊富に湧き出していた。（元糺の池があるこの木嶋社の社叢を“元糺の森”と言い、下鴨神社の“糺の森”的元である。）液体の水は比透磁率が1より小さい=負の透磁率なので、宇宙を貫くS極系エーテル纖維=龍のエネルギーの良い媒介物であり、龍の本質は創造神=天御中主神から溢れ出る無限の負のエネルギー（比透磁率及び比誘電率が1未満のS極磁気単極エーテルエネルギー）=豊受大神である。

すなわち、**木嶋坐天照御魂神社**の3本柱鳥居は、天御中主神の無限のエネルギーである豊受大神、そこから遍く発して総てを包み込む無限の光である天照大神、この両者が一体となって天御中主神を形成していることを意味し、3本柱は豊受大神、天照大神、天御中主神を暗示する。3本柱鳥居は造化三神を示しているとも言われるが、それでは中心にある依り代の意味が説明できない。（本来は）水の中にある依り代は、天御中主神から溢れ出る無限の負のエネルギーを意味する。

そして、この3本柱鳥居は「生命の樹」でもあることは、言うまでも無いが、これはまた、白地に赤丸の“日の丸”である。丸は一画だから陽数、赤は色として陽、四角は四画だから陰数、白は色としては陰故に、赤丸は陽である天照大神、白地は陰である豊受大神、両者一体となって天御中主神を暗示し、白地がベースであることは、天照大神の光は豊受大神のエネルギーから発せられていることを暗示する。



<http://kaiun.sseikatsu.net/konoshimazinza/>



なお、古代は牛が燔祭の犠牲として捧げられた。だから、古代の聖地の近くは牛の名産地であり、日本人は牛肉に格別のこだわりを見せる。牛を捌いて捧げるのは、血の穢れに関わる祭司レビの役目である。捌いた後には皮などが残り、血は川で洗い流す。牛の産地（精肉業）、皮革産業、川原、、。その地が避けられれば、その地は必然的に護られる。

(3) 新羅様式の弥勒菩薩像

広隆寺には、前述のように、国宝第1号となった木造の弥勒菩薩半跏思惟像がある。これは、秦河勝が聖徳太子から賜ったとされる。

この弥勒菩薩は当然、摩多羅神＝ミトラ神＝ウシトラノコンジンに対応するが、よくある百濟様式ではなく、新羅様式とされる。実は、新羅の建国には海部氏が関わっている。これについては、(1)で触れたが、ここで詳しく見ることとする。海部氏の伝承によると、丹波人が新羅に渡って脱解王となったという。(以下、Wikipediaより。)

脱解王は正式には脱解尼師今（ダッカイニシキン）と言い、生年は不詳で、AD80年に没している新羅の第4代の王（在位はAD57年～80年）であり、姓は昔（ソク）、名は脱解で、新羅の王族3姓（朴・昔・金）の内の昔氏の始祖である。『三国史記』の『新羅本紀・脱解尼師今紀』は、誕生及び即位について、お

よそ以下のように記している。

・倭国の東北一千里にある多婆那（たばな）国で、その王が女国の王女を妻に迎えて王妃とし、妊娠してから 7 年後に大きな卵を産んだ。人でありながら卵を産むというのは不吉故に、王は王妃に向かって、卵を捨て去るよう言つた。

しかし王妃は卵を捨てることに忍びず、卵を絹に包んで宝物と一緒に箱に入れて海に流した。やがて箱は金官国に流れ着き（BC19 年）、ある老婆の手で箱が開けられ、中から男の子が出てきた。老婆によりその男の子は育てられ、人並みならぬ知識を有するようになった。姓名が解らなかったので、箱が流れ着いた時に鶴（かささぎ）が傍にいたことから、鶴の字を略して“昔”を姓とし、箱を開いて生まれてきたことから“脱解”と命名した。

長じて軍事・国政を委任され、AD57 年 10 月に王位に就いた。AD80 年 8 月に死去し、首都金城（慶州市）の北壤井丘に葬られた。

卵は通常の出産ではないから、このような逸話の場合、異国から来た者を象徴している。多婆那国は丹波国の転じたものであり、丹後はかつて大丹波国を中心地だった。『三国遺事』では、脱解の出身地は多婆那国ではなく龍城国とされているが、これは龍宮城を連想させ、龍宮伝説に關係の深い籠神社が鎮座する丹後を表している。

更に、AD65 年には後の金氏王統の始祖となる金闕智（キンアッチ、第 13 代味鄒（ミスウ）尼師今（ミシテモ）の 7 世祖）を瓠公（ココウ）が発見し、跡継ぎとして養育したという。瓠公（生没年不詳）は新羅の建国時に諸王に仕えた重臣であり、元は倭人ともされており（故に生没年不詳）、新羅の 3 王統の始祖のすべてに関わる、新羅建国時代の重要人物である。瓠（ひさご=ひょうたん）を腰に下げて海を渡って來たことからその名が付いた、と『三国史記』は伝えている。初代新羅王の赫居世居西干（カクキヨセイキヨセイカン）の朴姓も同じ瓠から取られているため、同一人物を指しているのではないか、という説もある。

そして、籠神社奥宮・眞名井神社の伝承では、天のヨサヅラ（瓢箪（ひょうたん）=瓠瓜の褒め言葉）に眞名井の御神水を入れてお供えされたので、ヨサノ宮（吉佐宮）と呼ばれるようになったという。吉佐宮の古名の 1 つが“瓠宮（よさのみや）”であり、現在も入り口の向かって右側に“瓠宮大神宮”とある。つまり、ひょうたんに関わる話の元は、籠神社なのである。

すなわち、脱解王も瓠公も、王となるべき海部氏の重要人物であり、新羅建国の根幹を成している。逆に、新羅からの渡来者の話もある。まずは、延鳥郎（ヨンオラン）と細鳥女（セオニヨ）の逸話である。13 世紀末に高麗の高僧に

よって書かれた『三国遺事』にある。(以下、<日本の真相 6>より。)

- ・第8代・阿達羅王の即位4年(AD157年)の丁酉の年のこと。(半島の)東海の浜辺に夫婦で暮らしていた延鳥郎と細鳥女だが、ある日、延鳥郎が海中で海藻を探っていると、突然岩(魚の場合もあり)が出現し、延鳥郎を乗せて日本に帰った。

日本的人は「これは並みの人ではない」と言い、王に擁立した。細鳥女は夫を探し求め、同様に岩が彼女を日本に運んだ。夫婦は日本で再会し、細鳥女は后とされた。これにより、新羅の太陽と月は光を消してしまった。新羅王は使者を派遣したが、延鳥郎は天命として帰らず、代わりに、后が織る薄絹を渡した。使者はその薄絹を持ち帰り、新羅王が薄絹を奉じて天を祀ると、太陽と月は元に戻った。その薄絹は国宝として国王の倉庫に収納され、天を祀った場所を迎日県、または都祁野(ときの)と名付けた。

この都祁野に因むのが、現在の奈良の都祁野(都介野、つけの)であり、卑弥呼の邪馬台国があったと推測される場所である。“とき”は古代朝鮮語で“日の出”を意味し、まさに日の出を挙げる“時を告げる”場所であり、新たな太陽祭祀を始めた邪馬台国に相応しい。そして、延鳥郎と細鳥女はカラス男とカラス女だが、カラスは太陽神の使いや化身とされている。

また、赤い玉や赤織の絹の“赤”は、古代に見られた瑞兆の象徴であり、火の鳥=フェニックス=不老不死と太陽に由来するもので、海部氏の象徴である。

似たような話が、天日槍=天之日矛(アメノヒホコ)の逸話である。

- ・赤い玉が変化した妻、阿加流比売神(アカルヒメ)を追って天之日矛は但馬国に上陸し、そこで現地の娘、前津見と結婚した。(古事記)
- ・新羅王子の天日槍が7種の神宝を持参して渡来し、但馬国の出石に定住して現地の娘、麻多鳥(マタオ)と結婚した。(日本書紀)

記紀では、男が女を追って渡來したことになっており、『三国遺事』とは「合わせ鏡」で逆にされている。しかし、記紀のいずれも但馬国で結婚したこと、“鳥”という文字を冠する人物の登場は共通しており、但馬は大丹波国的一部だから、海部氏を象徴している。しかも、アメノヒホコは新羅の王子とされている。

また、絹を持って帰る話は、日本書紀に登場する。ここでは新羅が任那に変えられ、新羅が悪者扱いである。

- ・都怒我阿羅斯等（ツヌガアラシト）は崇神天皇の御世に加羅=任那から渡来し、垂仁天皇に3年仕えた後、帰国した。その際、垂仁天皇から赤織の絹を賜って帰国し、自分の国の蔵に収めて大切に保管したが、新羅人がそれを聞いて兵を起こしてやって来て、その絹をすべて奪って行った。

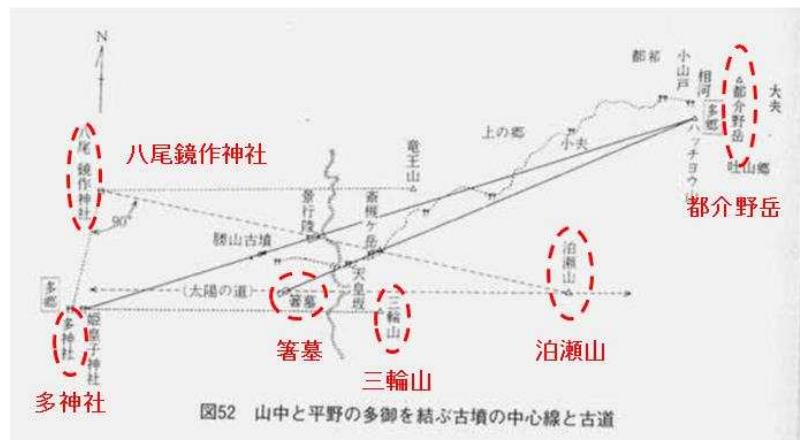
記紀は13世紀末に書かれた『三国遺事』よりも遙か以前に完成されているので、記紀が『三国遺事』を真似たのではない。人々、日本にも朝鮮半島にも同じ話が伝承されていた、ということである。

都介野岳の様相



<http://park.geocities.jp/yamasupa3/tugefuj.html>

都介野岳の位置関係



『ヤマト古代祭祀の謎』、小川光三、学生社

つまり、どちらも共通の史実を基に書き上げられたのである。それは、天日槍＝天之日矛伝承である。これは、いわゆる里帰り現象で、半島に渡って新羅のベースを創った瓠公と脱解王など海部氏系の子孫が戻って来たのである。それが、新羅の王子として暗示されている。

正史に於いて、天日矛が渡来したのは垂仁天皇 3 年とされるが、垂仁天皇の生没年は BC69 年～AD70 年で、垂仁天皇 3 年は BC27 年となる。新羅という国

の建国は AD356 年とされているから、この場合の新羅とは、BC2 世紀末から AD4 世紀にかけて存在した辰韓のことである。だから、天之日矛が新羅の王子とされているのは、新羅に関わる一族の者という暗示であり、正史に於ける年代には作為が成され、真相が隠されている。

天之日矛は 7 種あるいは 8 種の神宝を持参したとされているが、それらはいずれも海上の波風を鎮める呪具とされ、その中には、海部氏が代々手渡しで継承してきた奥津鏡＝息津鏡（おきつかがみ）と辺津鏡（へつかがみ）があることからも、天之日矛は海部氏に極めて関係の深い人物なのである。



海部光彦編著、元伊勢籠神社社務所、
『元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図 増補版』

ちなみに、イナンナが大元となっている“不老不死”を求めた始皇帝と徐福の姓は“嬴（えい）”である。息津鏡は「瀛津鏡」とも書くが、これは“瀛”に水を表すさんずいが付いている。徐福一団は同じくイナンナを最高神とし、海神をも奉じる海部氏と婚姻関係を結び、物部氏となった。「瀛津鏡」の“瀛”は“うみ”とも読み、海部氏が祀る海神を暗示するが、それは始皇帝と徐福の姓に因み、且つ、“瀛”の字を当てて“瀛津＝おきつ”と読ませ、“(アジア大陸の)沖の果ての船着場”という意味となる。“瀛＝おき”はまた“沖＝海原”という意味をも含み、大海原に関わる海部（あま）と海神を暗示する。もう 1 枚の辺津鏡は、“果ての船着場”という意味で“辺津”となっている。

また、ツヌガアラシトは=角がある人=鬼の喩えで、封印された鬼=ウシトラノコンジンを祀る鬼の一族=海部氏系の暗示であり、この時の天皇はやはり天之日矛と同じく垂仁天皇であり、垂仁天皇は丹波から妻を得ている。日葉酢媛（ヒバスヒメ、丹波道主王の女）、渟葉田瓊入媛（ヌバタニイリヒメ、日葉酢媛の妹）、真砥野媛（マトノヒメ、日葉酢媛の妹）、薌瓊入媛（アザミニイリヒメ、日葉酢媛の妹）だが、特に日葉酢媛の娘には、後に神宮を創祀して初の斎宮となつた倭姫がいるのは注目である。また、垂仁天皇の先代の崇神天皇（=

オトヨノミコト、徐福系葛城氏) の時代、トヨが巫女女王となって大統一王国が成し遂げられた。(＜神の名を冠する天皇＞)

なお、絹も海部氏に関わりが深く、丹後ちりめんはその典型で、丹後地方は国内の約 1/3 の絹を消費する最大の絹織物産地である。(その関係もあり、大手纖維製品メーカーのグンゼ発祥地は綾部である。) そして、海部氏の領地だった木嶋坐天照御魂神社の通称は、絹に関わる“蚕の社”である。これから分かるように、絹は秦氏の特権のように思われているが、そうではない！

以上、広隆寺の聖徳太子像、牛祭、新羅様式の弥勒菩薩像により、聖徳太子は海部氏の血統の大王であることが暗示されている。そして、弥勒菩薩＝救世主がイエスだけではなく、救世主的性質を有する海部氏の最高神イナンナも暗示する。

10：夢殿

夢殿



Wikipedia

救世観音像



聖徳太子縁と言えば、四天王寺や広隆寺以外に法隆寺も有名である。法隆寺には、聖徳太子の等身像とされる救世観音（ぐぜかんのん）像を安置する夢殿がある。夢殿は、法隆寺東院の中心にある八角円堂である。東院伽藍は聖徳太子の斑鳩宮があったとされる所で、太子一族滅亡の後、AD738年頃に建造された。斑鳩宮の同名の建物の中に聖徳太子が時々籠り、夢の中で金人(仏像)が現れて妙義を告げたという伝説に基づく。

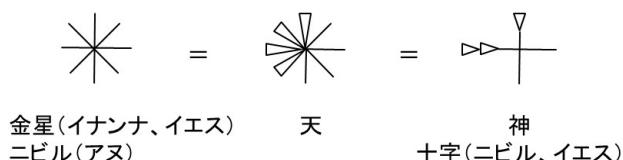
夢に関わる有名なユダヤ系の人物がヨセフである。ヨセフは兄たちから疎まれてエジプトに売られ、そこでファラオなどの夢を解き明かして宰相となった。

このヨセフの次男がエフライムで、祖父ヤコブからの祝福を兄マナセに優先して受け、十支族の中の筆頭大王家となった。つまり、ヨセフの後継がエフライムであり、王権の印としてアロンの杖を持っていた。

海部氏は、兄弟分家の尾張氏が草薙神剣＝アロンの杖を有することからして、エフライム族である。（神器は、元々保有していた一族にしか保有できない。）だからこそ、海部氏の大王だった聖徳太子縁の建物として、夢に関わる夢殿が建造された。

夢殿の八角形は八芒星であり、八芒星はニビルと金星、アヌ、イナンナ、イエス（＝ベツレヘムの星）のシンボルである。救世観音は経典には出てこないが、人々を世の苦しみから救う観音とされるから救世主で、救世主イエスの原型はイナンナである。そして、海部氏の最高神もまたイナンナである。故に、夢殿は八角形であり、救世観音が安置されている。

粘土板のシンボルと楔型文字



また、前述の広隆寺では、聖徳太子は大工の祖としても崇められているが、聖徳太子にイエスが投影されているならば、イエスの養父ヨセフは大工であったとされ、大工は石工（いしく）と同様、フリーメイソンの祖と見なされる。

なお、十支族（ルベン、シメオン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、マナセ、エフライム）はエフライムを筆頭大王家として、サマリアを拠点とした。サマリアのヘブライ語“ショムロン”は、“小さなシュメール”という意味からしても、シュメール王家の系統であることは明白である。

11：慧慈（エジ）法師と百濟寺（ひやくさいじ）について。

(1) 慧慈法師（Wikipedia）

慧慈法師は推古天皇の時代に、高句麗から渡來した僧である。聖徳太子の仏教の師となった。仏教を日本に広め、百濟の僧・慧聰（エソウ）と共に、蘇我氏縁の飛鳥寺の住僧となり、三宝の棟梁と称された。聖徳太子が著した法華經（ほけきょう）・勝鬘經（しょうまんぎょう）・維摩經（ゆいまぎょう）の注釈書『三經義疏（さんぎょうぎしょ）』を携えて高句麗へ帰国した。

また、以下に依れば、『釈日本紀（しゃくにほんぎ）』に引用されている『伊予国風土記』逸文には、聖徳太子と葛城臣と共に伊予の湯郡（ゆのこおり）の湯岡（ゆのおか）＝道後温泉を見て、碑文を作っている。

<http://ryuchan60.seesaa.net/article/435099472.html>

・日月が天上にあって世界を遍く照らし、温泉が地から湧き出て、誰にも恩恵を与えるように、偏ることの無い政治を行い、国民が安らかに生活できれば、これは寿國と同じである。

太子と葛城氏＝蘇我氏の密接な関係はここまで見えてきたとおりだが、この碑文は、実は今日まで現物は発見されていない。道後温泉は、日本書記にも登場する我が国最古と言われる温泉であり、景行、仲哀、舒明、齊明、天智、天武などの各天皇、神功皇后など、多くの皇族方が行幸したとされる。すなわち、皇室直轄の湯の邑（むら）である。

温泉地帯は地殻活動が活発な所で、金や水銀の鉱脈がある。これらを採掘すれば、必然的に温泉や水が湧く。金は縄文海人が管理し、水銀朱は弥生海人の海部氏が管理した。水銀は金を溶かしてアマルガムを形成するので、神社や仏像などの金メッキには不可欠のものであった。

また、水銀朱は不老不死の妙薬とされたが、ハンセン病治療にも有効な治療薬であった。皇室とハンセン病患者との関係は古くまで遡り、奈良時代の光明皇后（第45代・聖武天皇の皇后）はハンセン病の救済施設として悲田院（ひでんいん）や施薬院（やくいん、せやくいん）を建設され、患者の膿を吸い取ったという逸話もあり、昭憲皇太后（明治天皇の皇后）は民間の療養所に支援金を贈り、今上天皇陛下は特別な关心をお寄せになって患者を見舞われている。民間では差別的対象とされていたのに、皇族方は心を寄せられ、皇族方を代表して皇后が率先して見舞われていたのである。

さて、縄文海人が管理した金は、半島の羅津を拠点とし、大陸との交易を行っていた。羅津は現在の北朝鮮にあるが、ロシアとの国境に近い。（これ故、満州や北朝鮮の問題は、一筋縄ではいかない。）つまり、昔で言えば高句麗である。

また、伊予国には、縄文の最高神で地球の主エンキを祀る日本総鎮守・大山祇神社が鎮座する。このように、慧慈は縄文海人と深い関係が伺える。（<縄文海人（あま）と弥生海人><瀬織津姫と菊理姫－シリウス系と太陽系>。以下もこれらを参照。）

(2) 百濟と高句麗

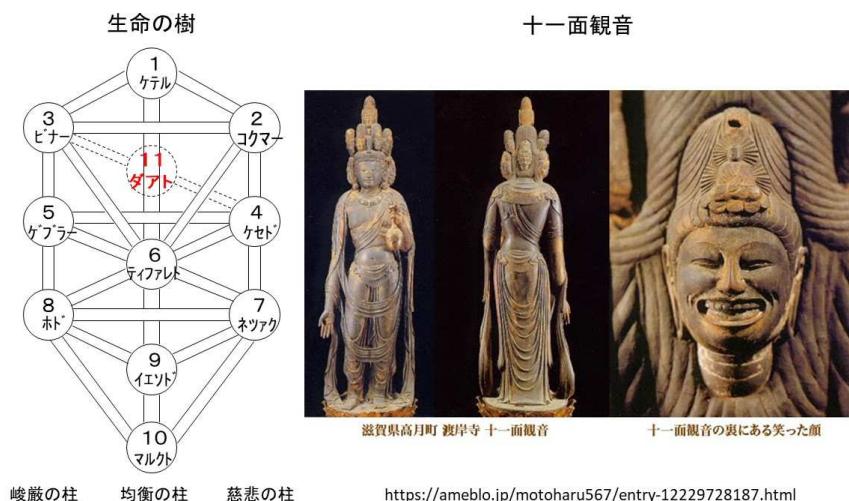
聖德太子は新羅建国に関わった海部氏系である。そこに、高句麗の僧と百濟の僧が合わされば、朝鮮半島すべてとなる。これにより、大陸との交易がスムーズになる。

(3) 百濟寺

慧慈と聖徳太子が開基に関わる寺に、百濟寺がある。百濟寺は、滋賀県東近江市にある天台宗の寺院で、琵琶湖の東、鈴鹿山脈の西山腹に位置する。本尊は十一面観音で、金剛輪寺（こんごうりんじ）、西明寺（さいみょうじ）と共に湖東三山の一つとして知られる。以下がこの寺の謂れである。（Wikipedia）

・聖徳太子は慧慈と共にこの地に至った時、山中に不思議な光を見た。その光の元を訪ねて行くと、それは靈木の杉であった。太子はその杉を、根が付いた立ち木のまま刻んで十一面観音の像を作り、像を囲むように堂を建てた。これが百濟寺の始まりであり、百濟の龍雲寺に倣って寺を建てたので百濟寺と号したという。

“くだらでら”ではなく“ひやくさいじ”と読ませているのは、本当の百濟由来ではないからである。それが、“くだらない”という言葉にもなっている。そもそも、慧慈は高句麗の僧とされている。また、十一面観音は「生命の樹」に於ける隠されたセフィラ “ダート” も含めたセフィロトの数を意味する木造だから、「生命の樹」を具現化したものである。ダートは悟りの知恵で、十一面観音では後ろにある笑った顔であり、イナンナは知恵の女神である。



<https://ameblo.jp/motoharu567/entry-12229728187.html>

では、この寺の真意は何なのか？この近くには多賀大社、甲賀、三上山（みかみやま）、伊勢遺跡があるが、これらが鍵となる。

多賀大社はイザナギ、イザナミを祀る社である。一帯を支配した豪族・犬上君（イヌカミノキミ）の祖神を祀ったとの説があるが、犬上=犬神="Dog God" =シリウスだから、縄文の最高神である。（しかも、“Dog”と“God”的文字配列が「合わせ鏡」となっている。）

甲賀と言えば甲賀忍者だが、聖徳太子は秦河勝、服部氏（伊賀忍者の祖）、大伴細人（甲賀忍者の祖）らを使って、各地の情報を収集し、忍び集団を設立したとされる。大伴氏は佐伯氏と同族関係とされ、落合完爾氏に依れば、佐伯氏は修驗縄文海人系である。特に甲賀は、普段は農業や行商で情報収集し、指令が下ると戦場やその後方へ出向き、工作活動に励んだ。薬の扱いにも長けていたが、これも縄文海人に特徴的である。

三上山は近江富士として知られ、麓にある御上（みかみ）神社=三神神社では、鍛冶の神である天目一箇神（アメノマヒトツノカミ）と同一視される天之御影命（アメノミカゲノミコト、天照大神の孫）が祀られ、日本第二の忌火の神とされる。三上山山頂には奥宮が鎮座し、奥宮前には磐座が残っているが、ここでも天之御影神が祀られる。（2018年に御遷座1,300年祭が斎行された。）

三上山



御上神社奥宮と磐座



Wikipedia

海部氏系図に依れば、天村雲命の子の倭宿祢命（ヤマトノスクネノミコト）の亦名が天御蔭命であり、倭宿祢命の曾孫、建田勢命（タケダセノミコト）の時代に、“天御蔭之鏡と天村雲之刀を二靈神宝とする”とある。天御蔭之鏡は太陽神の分身となる鏡、天村雲之刀=天村雲剣=草薙神剣は降臨の依り代であり、この時代に鏡と剣による祭祀の基ができた。（倭宿祢命は神武天皇を導いたともされる。）

天之御影命が鍛冶の神ならば、それは製鉄=剣を暗示する。ならば、奥宮の磐座は、剣を依り代として降臨する太陽神祭祀を暗示する。

また、籠神社の秘伝に依れば、天御蔭命は彦火明命の亦名とも言う。これな

らば確かに“忌火の神”で、彦火明命は海部氏の祖とされ、正式名は天照国照彦天火明櫛玉饒速日命であるが、これは記紀が成立後に創作された神名で、天照国照彦(アマテルクニテルヒコ、本来の天照大神)、天火明命(記紀創作の神)、櫛玉神(クシタマノカミ=奇魂神=三輪山の大物主神=大国主神の和魂)、饒速日命(ニギハヤヒノミコト、ニニギ以前に天孫降臨していた神)の習合神である。これは、本来の天照大神を隠すために創られた。本来の天照大神とは、9:(2)に記したように、太陽神としての天照大神ではなく、天御中主神の無限のエネルギーである豊受大神から発している、総てを遍く照らし包み込む天照大神である。

太陽は光を発するが、必ず影ができる。しかし、創造主=天御中主神から発せられる光は全方位に広がり、あらゆるものをお包み込んで影ができない。これを「おかげさま=御蔭様」と言い、別の読み方をしたのが“みかけ”である。だから、天御中主神、豊受大神、天照大神を暗示する“三上山=三神山”で祀られている。これは、籠神社の極秘伝“天御中主神=豊受大神=天照大神”に他ならない。京都市内の葵祭の元となった籠神社の葵祭は藤祭り=不死祭りとも言われるが、御蔭神事とも言われるには、このことを裏付ける。また、藤祭りは眞名井神社の鎮座する眞名井原での水による御生れ(みあれ)の神事だが、これも9:(2)に記した木嶋坐天照御魂神社の神泉“元糺の池”と同義である。

なお、本来は光の神=陽なのにわざわざ“忌火の神”=陰と称していることからすると、天御中主神の光の側面よりも、すべてを産み出すエネルギーという点に於いて、現在のシリウス=太陽系を産み出した後に、見えない(=陰)白色矮星となったシリウスBの方に重きを置いていたと言った方が、より適切な解釈と言えるだろう。そうすれば、前述の多賀大社、甲賀、そして三上山で縄文の最高神を祀っていることとなる。シリウスは五芒星としても描かれるので(<星の信仰－太陽信仰の本質>)、前述の広隆寺に奉納されている五芒星は、シリウスをも暗示していると言える。

この三上山の西南西の方向には、伊勢遺跡がある。(伊勢遺跡の経度(136.0度)、緯度(35.0度)から夏至の日の出、冬至の日の入り等を割り出しても、合致しないのは残念。)

<http://keisan.casio.jp/exec/system/1184726771>

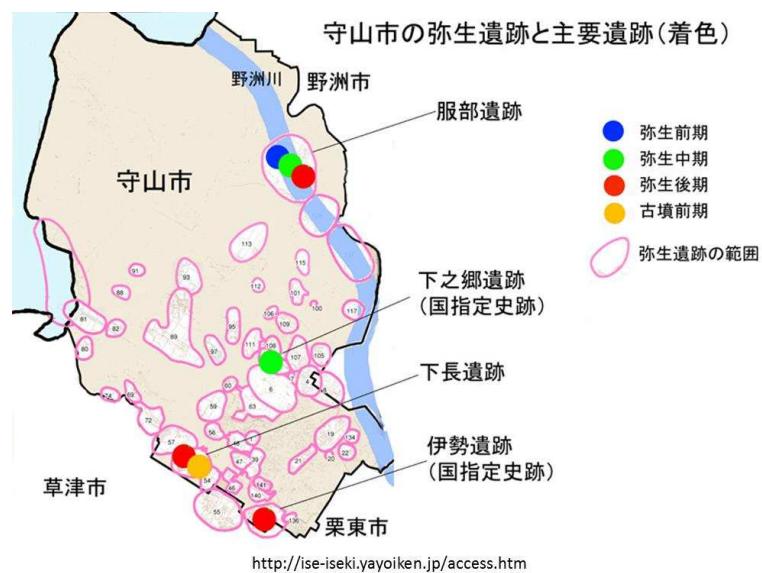
<http://ise-iseki.yayoiken.jp/index.htm>

東西約700メートル、南北約450メートルにも及ぶ、明らかな弥生時代後期の大規模遺跡で、大型建物が計画的に立ち並ぶが、生活遺物はほとんど無い、祭祀空間を持つ遺跡であり、その点に於いて纏向の遺跡と類似している。神宮の

神殿と同様な掘立式の棟持柱付き神明造り様式が存在し、出雲の大社造りとよく似た様式のものも見受けられる。区画溝より取水する導水施設が発見されており、水を使った祭祀が行われていたことを予測させる。

弥生時代後期半ばに突如現れて巨大化し、後期末にはその使命を終えたことから、邪馬台国の前身とも考えられ、伊勢神宮も、この遺跡を神宮に先駆ける祭祀遺跡と認めている。

これに対して、近くの下之郷遺跡の環濠からは、生活や環境が復元できるような、遺物が多量に出土している。もちろん、この下之郷という地名は、伊雑宮のある“上之郷”及び卑弥呼の邪馬台国が存在した都祁野の“上の郷”に対応していることは言うまでもない。



縄文の祭祀、シリウスと天御中主神信仰、邪馬台国及びそれと繋がる伊勢神

宮の基となる祭祀場で、縄文海人と弥生海人（海部氏）が重なるのがこの地である。そして、現在の神宮は縄文の杜の中に、弥生の高床式倉庫型の神殿が調和した聖域なので、伊勢と同義的な場所である。

以上、慧慈法師と百濟寺の真意は以下となる。

- ・縄文から邪馬台国をも暗示する海部氏の弥生王国へ祭祀の流れが、伊勢神宮の祭祀にまでスムーズに繋がっている。
- ・祭祀の中心は、十一面觀音＝「生命の樹」である。
- ・“くだらでら”ではなく“ひやくさいじ”と読ませ、新羅建国に関わった海部氏系の大王、聖德太子を関係させることにより、百濟由来ではないことを暗示しているが、これは真相を隠すためである。
- ・修驗縄文海人系が基となっている忍び集団を聖德太子が組織したこと、慧慈法師を聖德太子の仏教の師と位置付けることにより、聖德太子以後、國體を采配しているのは縄文海人系であることを暗示している。

百濟寺のあるこの地を治めていたのは息長（オキナガ）氏である。正史に於いて、息長氏の血統からは応神天皇の母とされる神功皇后が出ており、日本書紀の一書（あるふみ）に於いては、神功皇后のモデルは卑弥呼であることを推測させている。そのような重要な血統であるにも関わらず、息長氏は文献的に記述が少ない謎の氏族である。次の項では、この息長氏について考察しよう。

(4) 息長氏

息長氏は和珥（ワニ）氏と共に近江水系を支配し、琵琶湖の西岸が和珥氏、東岸が息長氏が治めた。ここでは息長氏に着目すべきだが、先に和珥氏を見てみる。

①和珥氏

和珥氏の始祖は第5代・孝昭天皇の長男、天足彦国押人命（アメタラシヒコクニオシヒトノミコト）とされる。母は世襲足媛（ヨソタラシヒメ）で、尾張連の遠祖・瀛津世襲命（オキツヨソノミコト）の妹とされる。

この一族の本業は、朱の生産であったとされている。出自については2世紀頃、日本海側から畿内に進出した太陽信仰を持つ鍛冶集団とする説がある。（以上、Wikipedia。）

第5代天皇は海部氏系の隠された大王である欠史八代の天皇で、母は海部氏と兄弟分家の尾張氏である。そして、朱は水銀朱を意味するが、不老不死の妙

薬として水銀朱を求めた一族ならば海部氏系の一族であり（水銀朱=丹生（にゅう）は同族の丹生一族が管理した）、海部氏は丹波から南下してヤマトへと入った、不老不死信仰と製鉄技術を持つ一族である。

和珥氏=和邇氏の名は若狭が発祥とされる。タケフルクマが若狭の木津高向宮で応神に王権委譲し、以降は海部氏は大王から海部直となつたから、若狭は海部氏の領地である。ワニカイトという集落があり、現在も玉造りの生産をしている。

すなわち、和珥氏=和邇氏は海部氏と同族である。和珥氏は天皇家に多くの妃を輩出しが、それも海部氏系だから故に、妃としての「妹の力」が必要だったからに他ならない。

そして、和珥氏は春日に移つてからは春日臣となつた。春日と言えば中臣氏・藤原氏の氏神である春日大社だが、鎌足が中臣氏に背乗りして以後（<皇位継承問題-詳細>）、本来の中臣氏は大中臣氏となつた。つまり、中臣氏の大元はこの春日氏=和珥氏であり、後に大中臣氏となつた。

②息長氏

近江水系を支配した息長氏は、応神天皇の皇子、若野毛二俣王（ワカヌケフタマタノミコ）の子、意富富杼王（オオホドノオオキミ）を祖とする。また、山津照（やまつてる）神社の伝に依れば、国常立命を祖神とする。

息長という地名は、湖東北の坂田郡の地名で、息長氏の勢力圏は坂田を中心とする南と北で、美濃・尾張とも密接な関係を持っていた。繼体天皇は意富富杼王の曾孫でもあり、意富富杼王は息長氏、波多氏など、八氏族の祖であるとされている。繼体天皇は日本書紀では男大迹王（ヲホドノオオキミ）、古事記では袁本杼命（ヲホドノミコト）とされる。（以上、Wikipedia。）

応神は海部氏に婿入りした。海部氏の祖に意富那比命（オオナビノミコト）がおり、第8代・孝元天皇に比するが、この時代の女王が卑弥呼である。（<日本の真相5>）意富富杼王の名称は、この“意富”に由来するのだろう。

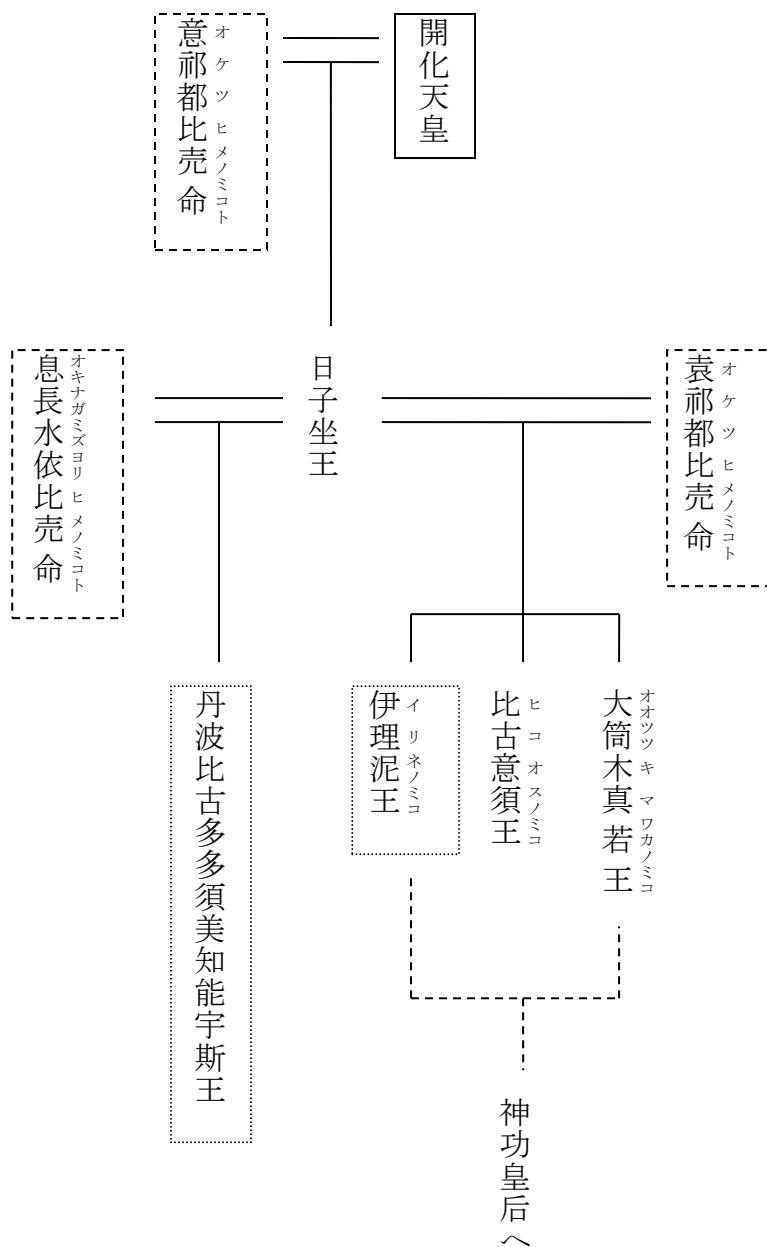
息長氏の祖が国常立命ならば、それは豊受大神のことでもあり、海部氏の最高神である。そして、尾張氏は海部氏の兄弟分家である。

更に、繼体天皇は海部氏系の大王で、意富富杼王の曾孫でもあるならば、意富富杼王も海部氏系の大王ということになる。

正史の系図に於いては、日子坐王（ヒコイマスオウ）の子、大筒木真若王（オオツツキマワカノミコ）の曾孫が神功皇后とされるが、神功皇后のモデルは卑弥呼とされ、卑弥呼は海部氏の祖である。大筒木真若王は正式には山代之大筒

木真若王と言い、山代は山背のことで、秦氏が治める以前、海部氏が治めていた領地である。

古事記の系図



神功皇后の父は息長宿禰王とされ、その父は迦邇米雷王（カニメイカヅチノミコ）、母は丹波之遠津臣の女・高材比売（タカキヒメ）とされる。雷は、籠神社の祭神・彦火明命の別名・賀茂別雷神を暗示し、海部氏と同族の上賀茂神社の御祭神であり、母は名前からして明らかに丹波の海部系である。

日子坐王のもう一人の息子は丹波比古多多須美知能宇斯王（タニハヒコタダスマチノウシノミコ）の名は“丹波”を冠し、“多多須”はかつての海部氏の領地「糺の森」の“糺”であることから、日子坐王は海部氏の血統である。（そもそも、「**日子」「彦**は海部氏系の暗示である。）ウシノミコは“牛の親王＝牛である親王”とも見なすならば、午頭天王＝摩多羅神＝薬師如来＝スサノオとなり、9：(2)に記した天御中主神のエネルギー的側面＝豊受大神＝国常立神である。そして、丹波比古多多須美知能宇斯王の母は息長水依比売で、天御蔭神の娘とされるが、これは天御蔭神＝本来の天照大神＝天御中主神の光の側面であり、豊受大神＝ウシノミコと合わせて天御中主神である。

日子坐王の母である意祁都比売命（オケツヒメノミコト）は、和珥氏の遠祖である和邇日子押人命（ワニヒコオシヒトノミコト）＝天足彦国押人命＝第5代・孝昭天皇の皇子の娘とされるので、海部氏と同族である。

日子坐王の妃である袁祁都比売命（オケツヒメノミコト）は日子坐王の母、意祁都比売命の妹とされるので、海部氏と同族である。（そもそも、オケツヒメという読みが同じなので、妹なのかどうかは疑わしい。）

そして、日子坐王自身、天皇の命によって丹波国に遣わされ、玖賀耳之御笠（クガミミノミカサ）を討ったことにされているが（古事記）、これは日子坐王が実は丹波の王であること、また、創作された古事記に於いて神功皇后を丹波と結びつけることにより、その皇子である応神天皇に「妹の力」を発揮できる丹波系巫女の血が流れしており、祭り主としての天皇の正統性を担保するがためのものだと言えよう。

ここで、海部氏の王である日子坐王の妃にわざわざ息長氏縁の息長水依比売（オキナガミズヨリヒメ）を登場させ、その子が丹波の王とされていることからすると、**息長氏は海部氏と同族ではないが、婚姻によって強い協力関係となつた一族**と見なすのが妥当である。それは、息長水依比売が天御蔭神の娘とされること、息長氏が近江水系を支配していたことからすると、**海部氏が渡来する以前から琵琶湖の水運を仕切っていた縄文海人の一族である**。今一度、最初に紹介した海部光彦氏の示唆を思い出して頂きたい。

・かつて海部氏は丹後地方にやって来て、その後、琵琶湖を渡って近江や東海地方に至り、また、京都から木津川を上って後のヤマトとなる地へと至った。

そして、以下に示す古代の街道の図を見て頂きたい。息長氏の名を冠する地名“息長”は古代の街道の要衝に位置することが分かる。



息長は北は越前・若狭へ通じ、琵琶湖水運に於ける湖北、湖南への結節点であると同時に、琵琶湖から東側に行く要衝にあり、現代に於いても東海道新幹線、東海道本線、名神高速道路が通過しているが、そのすぐ東側には不破関があって、明らかに関から西と東を分けている、つまり、関西から東国（関東）の分岐点である。（関から西を関西、東を関東と言う。）そして、尾張氏縁のヤマトタケルが崩御する原因となった伊吹山と、尾張氏が治める美濃・尾張がすぐ隣接する。

つまり、坂田～息長付近は若狭・丹後・山背（京都）から東海・関東（いずれも東国）へと抜ける要衝にあり、ここを押さえ、琵琶湖の水運を仕切っていたのが息長氏である。そして、ここを押さえない限り、東側は険しい山々が連なるから、陸路で東国に抜けることはできない。だが、不破関さえ抜けければ大垣～岐阜となり、かつて、岐阜から南は伊勢湾だった！昭和の初期まで、伊勢湾由来の湿地帯が広がっていた。現在の東海道線がかつての伊勢湾の境界にあり、岐阜から名古屋の熱田までは水路で一直線だったのである。当然、この水路には伊勢が含まれる。（『古代史の謎は「海路」で解ける』、長野正孝著、PHP文庫。）つまり、坂田～息長付近さえ押さえれば、水路を利用して容易に東国へ

抜けることができたのである。

前述のように若狭もまた海部氏の領地だったことからすると、海部氏は丹後地方にやって来て、その後、琵琶湖を渡って近江や東海地方に至ったのだから、海部氏・尾張氏が息長氏と和平を結ぶことによってそれが可能となったと考えられる。古代に於いて和平を結ぶことは婚姻関係を結ぶことに他ならず、それが前述の日子坐王と息長水依比売の関係として暗示されているのである。

この協力関係を示す証として、琵琶湖東岸の鏡山の東の麓の鏡谷は、海部氏縁の天日槍の従者たちが住んでいたところとされている。(鏡山は三上山の北東に位置する。)



つまり、琵琶湖西岸は丹後・若狭から地続きであるため、海部氏一族の和珥氏が、高島付近を拠点として治めていた。(高島付近は、皇室縁の百貨店・高島屋の発祥地であるなど、近江商人とも関わりが深い。) 対して、琵琶湖東岸は繩文海人の息長氏が治めていた。そして、海部氏がヤマトに進出するに当たって、東国を固めるために、息長氏との婚姻関係によって和平を結んだということである。

伊勢や尾張は明らかに關東で東国だが、海部氏・尾張氏縁のヤマトタケルが東国征伐した話は、武藏の地や東北に限ったことではなく、伊勢や尾張の開拓話でもあり、それは実は武力に依るものではなく、息長氏との深い協力関係に依るものだったのである。

後に息長氏の祖とされる意富富杼王は応神の孫とされ、波多氏=秦氏など八氏族の祖とされているのは年代から見ても記紀の作為だが、繼体天皇は意富富杼王の曾孫でもあり、繼体天皇は日本書紀では男大迹王（ヲホドノオオキミ）、

古事記では袁本杼命（ヲホドノミコト）とされる。（以上、Wikipedia。）

つまり、“オホドノキミ、ヲホドノキミ”は繼体天皇のことであり、“オオホドノオオキミ”は越の国＝北陸を中心として治めていた人物を暗示するのである。意富富杼王を秦氏の初代天皇である応神天皇の孫とし、そこに秦氏自らの祖である“波多氏”を結びつけ、更に本来は血統が秦氏ではない海部氏系の繼体天皇を意富富杼王の曾孫としているのは、皇位に断絶が無いかの如く施した作為であると言えよう。

③ “息長” という名の由来

「息が長い」とは、海に潜るアマのことを意味するとも考えられるが、以下に興味深い説が記載されているので引用する。

<https://blog.goo.ne.jp/himiko239ru/e/7c02ed4b0e3d418bcbd604001bdd9df>

- a) 生命力の長さを表しているという説。
- b) 水中で息を長く保つ海人を表しているという説。
- c) 輛（ふいご）で空気を吹き送って火を起こす様を表しているという説。

a)は長寿＝不老不死だから、海部氏の中心思想であり、b)は海部氏のアマそのものである。

かつて近江国は畿内最大の製鉄産地であったこと、製鉄炉の“たら”に風を送る「息吹き」「火吹き」が語源であるとされる伊福氏、伊福部（イオキベ）氏など、製鉄由来の名を冠した豪族が周辺地にいたことなどから、息長氏についてもc)であるというのが主流になってきた。

現在、滋賀県下では60カ所以上の製鉄遺跡が見つかっている。財団法人滋賀県文化財保護協会が1996年に発行した紀要に所収された大道和人氏の論文によると、滋賀県南部には逢坂山製鉄遺跡群、瀬田丘陵製鉄遺跡群、南郷・田上山製鉄遺跡群の3つの遺跡群に属する17カ所の遺跡が判明している。

西部では、和邇製鉄遺跡群および比良山製鉄遺跡群に属する12の遺跡があり、北部に於いては今津製鉄遺跡群、マキノ・西浅井製鉄遺跡群、浅井製鉄遺跡群に属する31カ所がある。このうち浅井製鉄遺跡群は伊吹山の北部、滋賀県と岐阜県の県境に位置する金糞岳（かなくそだけ）から南に延びる鉱床を背景とした遺跡群である。金糞岳の名も、鉄鉱石を精錬する時に出る鉄滓（てっさい）、すなわち金屎（かなくそ）が由来であるとする説がある。また、そこから流れ出る草野川を下ったところには鍛冶屋町という地名も残っている。このあたりは近江国浅井郡に属する地域だが、すぐ南が坂田郡である。

その坂田郡では、米原市能登瀬にある能登瀬遺跡から鉄滓が出土している。また、伊吹山の東麓、岐阜県不破郡垂井町の日守遺跡からも鉄滓が出ており、同町内にある美濃国一之宮たる南宮大社では、金山彦命が祀られている。この金山彦命は、イザナミが火の神であるカグツチを産んで大火傷を負い、苦しみのあまり吐き出した嘔吐物から生成した神である。金山彦という名はもとより、火の神に苦しんで吐き出された嘔吐物は製鉄炉から流れ出る鉄滓を意味しており、この神はまさに製鉄の神である。更に、同町の美濃国二之宮・伊富岐（いぶき）神社は製鉄氏族である伊福氏の祖神が祀られている。

このように、息長氏が本拠地としていた琵琶湖北部東岸から伊吹山の山麓にかけての一帯は広く製鉄が行われていた地域であり、まさに製鉄王国といつても過言ではない。長常真弓氏はその著「古代の鉄と神々」の中で「息長氏は伊吹山の鉄によって大をなした」と述べている。（ここまで引用。）

つまり、息長氏も深く製鉄に関わる一族なのである。これはまさに、要衝たるこの地域の霸権を譲ってくれたが故の、海部氏からの技術供与と言って良い。ヤマトタケルが草薙神剣を尾張のミヤズヒメのもとに置いてしまった、神の毒気に当たって死んでしまう原因となった伊吹山は、実は剣の製鉄に関わる息吹山、火吹山なのである。

前述の三上山では天之御影命が祀られているが、本来的には天御中主神であるはずが、天照大神の孫（つまり天孫）とされる鍛冶の神・天目一箇神と同一視されているのも、製鉄を取り仕切る海部氏が祀る天照大神に連なる一族として製鉄技術を供与されたことの暗示に他ならない。“日本第二の忌火の神”とされるのも、当時は最も重要だった溶鉱炉の火を暗示しているのである。（第一の忌火は神宮の忌火か？）

以上、息長氏の考察も含め、慧慈法師と百濟寺の関係をまとめる。

- ・慧慈と聖徳太子が開基に関わった百濟寺は、縄文祭祀を暗示する寺である。
- ・その地は縄文海人の息長氏が治める土地で、製鉄と琵琶湖水運を仕切った。
- ・縄文祭祀だけではなく、後の神宮に繋がる祭祀場もあり、海部氏との婚姻による密接な関係が伺え、海部氏が東国へ進出する起点となった。
- ・修驗縄文海人系が基となっている忍び集団を聖徳太子が組織したこと、慧慈法師を聖徳太子の仏教の師と位置付けることにより、聖徳太子以後、國體を采配しているのは縄文海人系であることを暗示している。

換言すれば、**海部氏の大王である聖徳太子を、縄文海人である慧慈が支える**

体制の雛形が、弥生海人大王家である海部氏を、縄文海人である息長氏が支えた体制なのである。

12：聖徳太子が日本に与えた役割

まずは朝貢を止めて、真の独立を果たしたこと。「日出処天子至書日没処天子～」で隋の煬帝を怒らせたが、これにより、大陸から真の独立を果たしたのである。今の日本の現状は如何に？

そしてもう一つはと言うと、やはり十七条憲法である。聖徳太子と言えば十七条憲法と言えるほどのものだが、原文は難しいので、主たる箇所を簡易訳として紹介しよう。十七条憲法は主に公務に携わる者への心得だが、誰もが心得るべき内容である。勿論、ベースとなったのは“モーゼ五書”の律法である。

(Wikipedia。17に聖徳太子自身を加えて18。 $18 = 6 + 6 + 6 = ミロク = 救世主。$)
ちなみに、有名な第一条の最初の部分は以下である。

「一に曰く、和（やわらぎ）を以て貴しと為し、忤（さか）ふること無きを宗とせよ。」

- ①和を尊重し、争わないようにしなさい。
- ②篤く三宝（仏法僧）を敬いなさい。三宝は生命ある者の最後の拠り所であり、すべての国の究極の規範である。
- ③君主（天皇）の命に、謹んで従いなさい。謹んで従わなければ、国家社会の和は自滅してゆくことだろう。
- ④政治家、官僚は礼の精神を基本としなさい。民に礼があれば、国は自然と治まる。
- ⑤政治家や官僚、裁判に関わる者達は、饗應を絶ち、私欲を捨てて、訴訟を厳正に審査しなさい。
- ⑥悪を懲らしめ、善を率先しなさい。（勸善懲惡。）こびへつらったりおもねり媚びる者は、忠義心や徳が無く、国家を乱す原因となる。
- ⑦それぞれの任務を忠実に履行し、権限を乱用してはならない。官職に適した人はいるが、人のために官職は無い。
- ⑧政治家や官僚は、朝早くから出仕し、夜遅くなってから帰りなさい。
- ⑨誠実と信頼は義の基本である。
- ⑩怒りの心を無くし、怒りの表情を出さないように。人には皆心があり、各々のこだわり（執着）があるのだから。
- ⑪功績・過失に見合う賞罰を適正に行いなさい。
- ⑫国司や国造（現在の自治体）は、勝手に税金を徴収してはならない。国の全

ての民は天皇を主とするからである。

- ⑬公人は職掌を熟知し、公務を停滞させてはならない。
- ⑭公人は、嫉妬心を持ってはならない。
- ⑮公務に対しては、私心を捨てなさい。
- ⑯人を使役する場合は、適切な時期を考えなさい。
- ⑰物事は一人で判断せず、皆で議論しなさい。

このようなことをわざわざ書き記さなければならなかつたのは、当時でも、こういったことが蔓延っていたからに他ならない。そして、現代では公務に限らず、企業活動に於いても言えることだろう。パワハラなどというのは、もつてのほかである。

“実るほど こうべを垂れる 稲穂かな”

十七条憲法で述べられていることの中では、以下のことが特に重要である。

- ・和を以て貴しと成す。
- ・政治家、官僚は礼の精神を基本とし、私欲を捨てること。
- ・権限を乱用してはならない。
- ・誠実と信頼は義の基本である。
- ・怒りの心を無くすこと。
- ・嫉妬心を持ってはならず、私心を捨てること。

つまり、一言で言えばエゴを捨てること。これはすなわち、眞名井の真理である。名に付いたエゴを捨て去り、本来あるべき眞の心に戻ることが最重要である。

籠神社

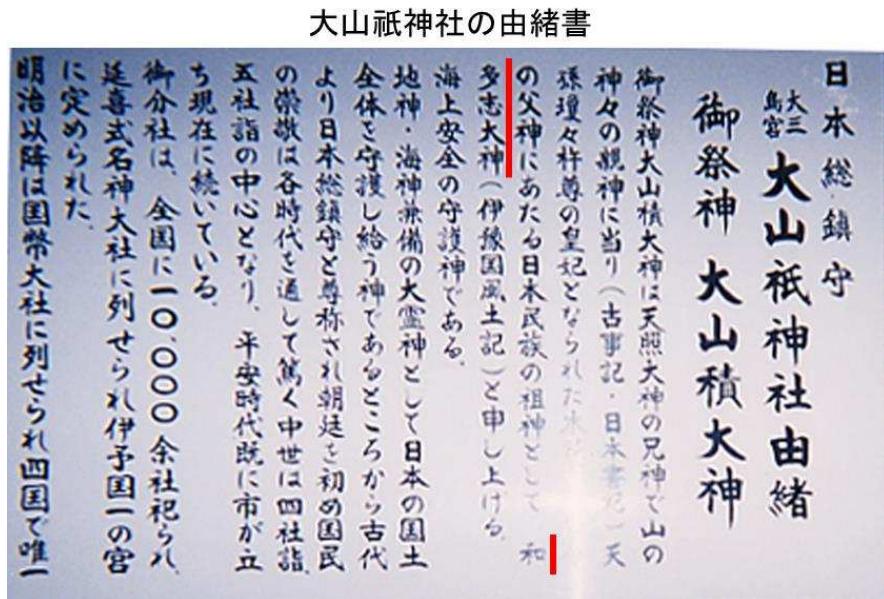


眞名井神社



<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B1%A0%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

そして、多くの和が志す「和多志」の神の真理。



これらを世界に広げることが、聖徳太子が暗示する日本の役割なのである。